

14.2

236

特輯第二號
昭和六年二月

栽桑並に養蠶實態調査成績

埼玉縣蠶業試驗場



始



142b-236

序

- 一、本調査は栽桑養蠶の實態を明かにし經營改善の資料に供する爲めに行つたもので主昭和五年の實績につき經營者の調査又は説述せる所を基として編輯せるものである。
- 一、茲に示せる實例は少數のものであるが此以外にも之れと同様又はこれ以上の適例が多數あることは云ふ迄もない。
- 一、經營實績に對する考察又は意見は經營者の云ふ所のみならず各々編輯擔任者の意見も加えてある。
- 一、今や我蠶糸業界は未曾有の難局に際會して居る。この難局打開の方法として養蠶家の採るべき途は良い繭を安くつくり其繭を有利に處理することである。裁桑養蠶に當りては自家の環境に照し本調査の實例を参考として經營改善に邁進せられん事を望む。
- 一、本調査を行ふに當り多くの資料と便宜を與えられた經營者各位に對し厚く感謝の意を表する次第である。



昭和六年二月

埼玉縣蠶業試驗場



栽桑並に養蠶實態調査成績

目次

一、調査せる實例の特徴	
二、多角經營の一部としての養蠶の實例	
實例一 北足立郡石戸村 岡村氏	九
實例二 大里郡大幡村 島田氏	一三
三、養畜養雞を加えたる養蠶の實例	
實例一 [養豚と養蠶] 兒玉郡藤田村 長谷川氏	一八
實例二 [養雞と養蠶] 入間郡日東村 内田氏	二二
實例三 [養牛、養雞と養蠶] 大里郡奈良村 小島氏	二五
實例四 [養馬、養豚と養蠶] 北葛飾郡吉田村 鈴木氏	二八
實例五 [緬羊飼育と養蠶] 群馬縣佐波郡 島村氏	三一
四、桑園に間作を行ひたる實例	
實例一 [馬鈴薯] 比企郡大河村 野口氏	三四
實例二 [馬鈴薯] 入間郡鶴ヶ島村 岸田氏	三九
實例三 [蒟蒻] 比企郡大岡村 新井氏	四三
實例四 [蒟蒻] 秩父郡金澤村 石井氏	四九
實例五 [タモ] 比企郡大河村 笠原氏	五三
實例六 [タモ] 秩父郡尾田村 小池氏	五八

實例七 [大麥] 入間郡高萩村 金子氏	六一
實例八 [葱] 兒玉郡北泉村 深田氏	六六
實例九 [福壽草] 大里郡藤澤村 神田氏	七〇
實例一〇 [福壽草] 大里郡武川村 塚越氏	七五
實例二 [水仙] 北足立郡原市町 齋藤氏	七九
實例三 [水仙] 入間郡大井村 野溝氏	八六
實例三 [ザイトウキツケン] 大里郡藤田村 金井氏	九〇
五、桑の收穫量多きもの、實例	
實例一 (反當八〇〇貫 生産費一貫五錢六厘) 秩父郡長者村 芝崎氏	九六
實例二 (反當七〇〇貫 生産費一貫八錢七厘) 秩父郡久那村 淺賀氏	九八
實例三 (反當七二〇貫 生産費一貫六錢五厘) 北埼玉郡元和村 小野氏	九九
六、少人數にて大量の繭を生産せる實例	
實例一 [繭一貫生産勞力二〇七] 比企郡菅谷村 山下氏	一〇二
實例二 [繭一貫生産勞力二二三] 秩父郡皆野町 吉田氏	一〇八
實例三 [繭一貫生産勞力二〇〇] 比企郡菅谷村 富岡氏	一一三
七、繭質優良のものを生産せる實例	
實例一 入間郡堀兼村 松本氏	一一九
實例二 大里郡玉井村 中村氏	一二〇
實例三 南埼玉郡平野村 塚本氏	一二二

八、共同事業を行ふもの、實例

- 實例一 [物資の共同購入] 某郡養蠶組合……………一二五
- 實例二 (物資の共同購入) 比企郡某養蠶組合……………一二六
- 實例三 [右] 同] 比企郡乾繭組合某支部……………一二九
- 實例四 [右] 同] 北足立郡某養蠶組合……………一三〇
- 實例五 [右] 同] 大里郡某養蠶組合……………一三一
- 實例六 [右] 同] 北埼玉郡某養蠶組合……………一三三

九、繭處理に關する實例

- 實例一 [乾繭組合を利用せる場合] 大里郡男沼村某養蠶組合……………一三七
- 實例二 [右] 同] 比企郡東吉見村某養蠶組合……………一三九
- 實例三 [委託製糸による繭處理] 大里郡中瀬村 西田氏……………一四一
- 實例四 [組合製糸を利用せる場合] 大里郡花園村某組合……………一四三
- 實例五 [自家製糸及機械の場合] 大里郡本島村 清水氏……………一四六
- 實例六 [右] 同] 入間郡飯能町 宮下氏……………一五三

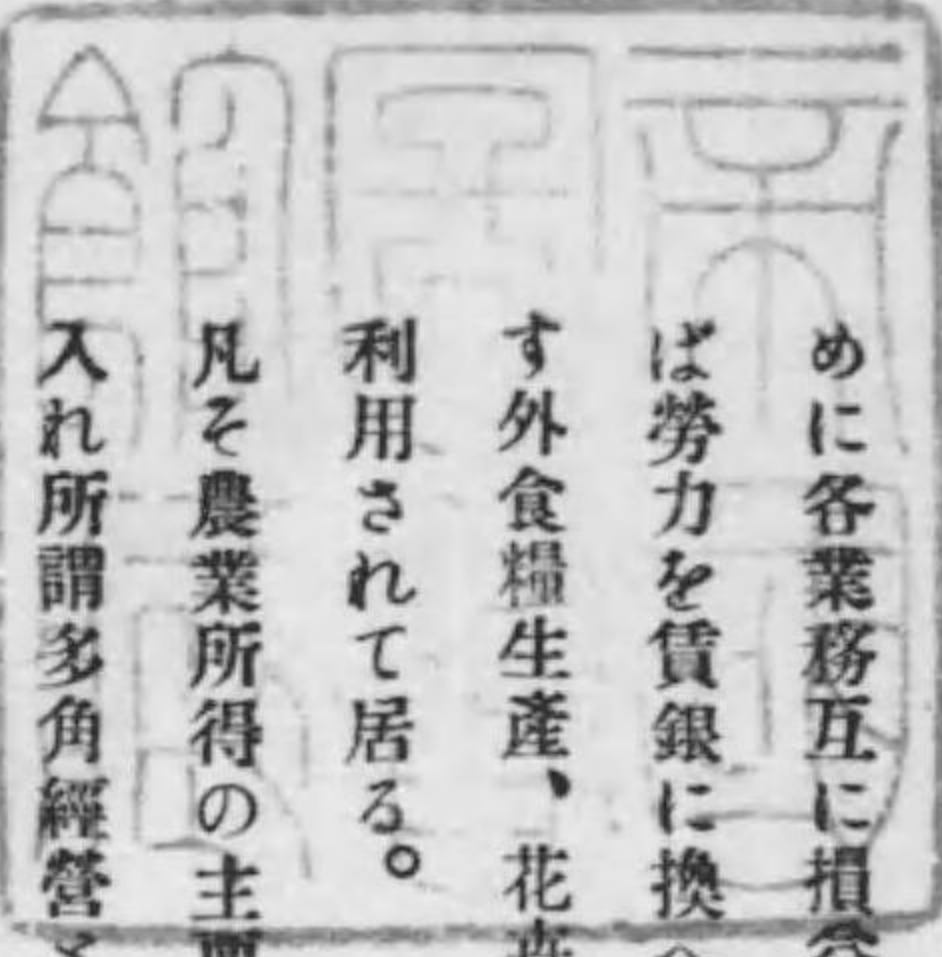
一〇、副産物處理の實例

- 實例一 [屑繭處理] 南埼玉郡大山村某組合……………一五七
- 實例二 [桑條白皮] 入間郡鶴ヶ島村 武藤氏……………一五九

一、調査せる實例の特徴

(一) 多角經營の一部として養蠶を行ふ實例の特徴

多角經營農業の一部として養蠶を行ふとせば專業的經營の場合に比し好況の影響を受くることも少いが又不況時の影響を受くることも少いのが特徴であらう、之れは一戸で食糧の生産其他多數の業務を行つて居る爲めに各業務互に損益を相殺するからである、尙多角經營により勞力を年中等均に分配し農閑期なき様になせば勞力を賃銀に換へた所得が多くなるのは云ふ迄もない。本調査の實例では自家努力で相當大量の養蠶をなす外食糧生産、花卉園藝、養畜、養雞、加工、山林等多數の業務を行つて居るので勞力が年中餘剰なき迄に利用されて居る。



凡そ農業所得の主要なものは自家勞力に對す賃銀であるから餘剰勞力なき様普通農作養蠶其他の作業を取り入れ所謂多角經營となすが得策である、尙多角經營につき注意すべきことは、

イ、業務の種類が多過ぎて孰れに對しても注意を欠くことなき様自家の状態に應じ業務の數を定むること。

ロ、米麥作、養蠶等の如く一、二の業務を主体とし之れに種々なる業務を附加すること。

ハ、附加すべき業務は生産販賣共に其地方に適當するものにして且つ他の業務と互に組合せよきものを選び

ニ、家族勞力を主とし勞力分配が年中均等なる様各種業務を組合はすこと。

以上は多角經營の一部として養蠶を行ふ實例から見た特徴と實行上の注意である。

(二) 養畜養雞を加へたる養蠶實例の特徴

養蠶と共に豚、牛、馬、緬羊又は雞等を飼養する實例は比較的多い此等養畜養雞をなすことは桑園肥料の自給を圖る上に頗る都合良く肥料を安價に供給して桑園の收穫量を多くし桑葉生産費を安くし従つて繭生産費の軽減上効果大なるを特徴とする。

農家の副業として養畜養雞を行ふことは種々なる点から見ても有利である、養畜養雞は其業務のみに付ても相當に利益があるが假りに市價の關係上利益の少ない場合に於ても肥料を安價に得らるゝこと及餘剩勞力が利用せらるゝこと等から見ても得策である。

又農家の經營規模大なる場合には牛又は馬を飼養し畜力を利用することの有利なるは云ふ迄もない假りに小規模の場合にありても農蠶業經營と養畜養雞は常に兼ね行ふが有利である。

尙家畜家禽の種類や數量は自家の状態に應じて定め危険なき様注意を要する。

(三) 桑園に間作を行へる實例の特徴

桑園間作として綠肥用作物を作り桑園肥料の自給を圖ることの得策なるは明であるが綠肥用作物以外の間作物に付ても本調査の實例に於ては大部分のものが相當の利益を得且つ桑の收穫量、葉質に殆んど悪影響がな

い様である。然れども間作物種類により販賣價格低き場合を生じて殆んど利なきこともある。

故に間作物の種類的選擇は大に注意を要する点にして先づ間作物の販賣又は處理法の便否を考へ次に地質の適否桑に對する影響等より考察して間作物を選むを要する。例へば蒟蒻栽培、福壽草栽培には各々特種の地質を要し水仙栽培が都會に近き地方に行はるゝが如きトロ、アフヒ(タモ)が製紙業地の近くに行はるゝ等は孰れも間作物の販賣處理の便否、地質の適否により間作物を異にせざるべからざるを證するものである而して其地方に適する間作物を栽培して同一地積よりの所得を多くするを宜しとするも間作物の生産量だけ桑が減收すれば結局利益なきことになるから桑に對し悪影響なきものを選むこと肝要である。

(四) 桑の收穫量多きもの、實例の特徴

桑の收穫量多きもの、實例としては僅三例を上げたのみなるが反當收穫量七〇〇貫乃至八〇〇貫である。其一例七〇〇貫について考ふるに繭一貫生産要桑量一五貫とすれば反當りの收穫額四〇貫餘となり、現在普通桑園の二倍餘の收穫で又養蠶作柄も良好である。其桑園經營の内容を見るに施肥は自給肥料が比較的多く反當經營費は四四圓から六〇圓で特に多くはないが桑の品種が孰れも改良鼠返で植付後五年又は七年で發育旺盛時にある。地質も良く植付株數や栽培、施肥等が適當して居るのは勿論天候に恵まれた点もあらうが收穫量の多い爲めに桑葉生産費が著しく安いのが特徴である。即ち一貫目當り五錢五厘乃至八錢七厘の生産費であるから従つて繭生産費の安いのも云ふ迄もない。養蠶業難局打開法の最も主要な点である。

次に桑多收穫につきては

イ、優良なる桑品種を栽培し老衰すれば直に改植すること。

ロ、多收穫となるも葉質を悪變せしめざる様栽培施肥等に注意すること

等は注意を要する主なる点である。

(五) 小人数にて大量の繭を生産せる實例の特徴

繭生産費軽減上前項の如く桑の生産費を低下することが重要なると共に更に作柄の安定と養蠶勞力の節約を圖ることも亦肝要なことである。

本調査の實績では繭一貫目生産に要する勞力は一、〇〇人乃至一、一〇人(春繭)にして往時の剝桑育時代に比すれば約三分の一に過ぎざる程度である。之れ飼育法が改良され簡易なる條桑育又は平座育となれるが爲めである。其實例内容を見るに桑園に至る距離の近きこと技術に熟達せること等亦一原因なるべし。而して初秋晩秋に於ては春蠶より勞力多きを要する如くなるも之れ採桑法が摘葉なる爲めなるべし。今後秋蠶條桑收穫法によるを可とす。尙養蠶勞力節約上注意すべきは。

イ、作柄を不安ならしめず且つ繭質を低下せざる程度に勞力節約をなすこと。

ロ、飼育技術の熟達に努むること。

等である。

(六) 繭質優良のものを生産せる實例の特徴

本調査は三例共大規模經營にして一年の産繭額約二百貫以上なるが繭檢定成績は春繭百匁の糸量十二匁以上にして優良の部に屬するものである。優良繭生産の原因としては蠶品種の良きこと、桑園の肥培に注意し葉質良きこと、飼育上簇の方法適當なること特に壯蠶期に薄飼とし充分食桑せしめ上簇の保護宜しきを得たること等である。而して此等方法を實行するには孰れも養蠶組合共同の力により桑園改良、飼育、技術の改良蠶品種の統一を圖つて居るのが特徴である、繭價安に際しては特に良繭を得て販賣原價を高からしむるを要し且つ優良生系の生産上より見るも原料繭質の向上統一が肝要である故に養蠶組合其他團體の共同の力により蠶種の購入、栽桑養蠶の改良を行ひ優良繭の生産をなし又同時に繭檢定を行つて品質相當の價格で取引し得らるゝ方法を講ぜなければならぬ。

(七) 共同事業を行ふもの、實例の特徴

共同事業として行はるゝものは栽桑養蠶に使用する物資の共同購入並に繭の共同販賣であつて其成績を見るに各例共に個人取引に比し共同取引が養蠶家に有利になつて居るのが特徴である。特に繭の共同販賣に於てそうである。之れ共同して大量取引が出来るのと共に蠶種共同購入により蠶品種が統一され飼育上簇についても組合員競争して改良をなし繭質の良くなる爲めであらう實に協同の力は偉大なものである乍然協同が行はるゝについては組合役員の犠牲的努力と組合員間の協調心が基である。組合員の協調により一致の行

動を取り得れば其れがやがて組合員全部の利益となるのであるから共同事行を行ひ利益を多く得んとせば犠牲的努力と各個の協調が最も肝要である。

(八) 繭處理に關する實例の特徴

(イ) 乾繭組合利用の場合

繭處理に關する實例中其郡の乾繭組合を利用して共同して乾繭販賣をなしたるものは前項共同事業の實例と同じく一般市價に比し割高に取引されて居る。之れ共同事業を行ふ場合の特徴と同一であるか乾繭販賣の時期により生繭當時の相場に比し高い事も安い事もあるのは當然である。故に乾繭販賣が必ずしも高値なりと云ふを得ない、要は生繭の如く品質の良否を瞬間的に定むるでなく繭檢定法により實質を明らかにし得ること、組合が適當の時期を見て販賣し得ること及取引上の不安なき等の特徴がある。

(ロ) 委託製絲による繭處理

委託製絲による繭處理方法は其實例は少いが本實例に見るに生繭當時の市價に比し繭一貫に對する受取金の少い場合と多い場合とある之れは生絲相場の高低による爲であることは云ふ迄もないが生繭で販賣した場合に比し所得金の多少は生絲相場の高低によるのであるから有利か不利か其場合場合により異なるものである。尙之れを行ふ場合は製絲家との契約方法につき相當に注意を要する。

(ハ) 組合製絲を利用して繭共同處理

本實例は一例に過ぎぬが多年間の實績では生繭當時の販賣に比し繭一貫目の配當金が増して居る勿論配當金中には繰絲の工賃も含んで居るのであるから工女の賃銀を差引いた金を市場の繭價と比較するのが正當であるけれども本調査では其れが不明である。農閑期に於ける婦人の勞力を賃銀化することは本實例の特徴の一つであらう、乍然前例の委託製絲の場合の如く生絲相場の高低により配當金に差を生ずるから常に一樣には考へられぬ其地方の婦女子の勞力に餘剩ある場合には組合製絲は頗る良い事である。

(ニ) 自家製絲及機械による繭處理

本實例は農家の工業化であつて一般農家が直ちに採用し得ぬ繭處理方法である。此の方法は婦女子の勞力を賃銀化するを特徴とし製絲及び機械に堪能なるものが家族中にある場合で且つ織物の販賣にも都合良き土地なることが條件となるのである。即ち生産のみならず織物販賣の方面を考へなければ應用は出来ない所謂特別な方法である。勿論織物相場にも高低があるから所得は場合により一樣ではないが婦女子の勞力を利用する上に於て頗る良い方法である。

(九) 副産物の處理實例の特徴

本實例として屑繭の處理と桑條白皮とあるが何れも農家の遺利收拾法として適當なものである。農閑期を利用して行ふに適し又相當の収益があるが此の實例に見る如く其生産品の販賣方法に付ては組合を作り共同して行ひ適當な販路を求むることは最も肝要である。自家使用の場合もあるけれども其生産が多くなれば販路

を求むることが必要であるが特に其方面の注意を要する。

二、多角經營ノ一部トシテ養蠶ヲ行フ實例

實例一

北足立郡石戸村 岡村氏

一、經營概況

(一) 家族及耕作概況

家		族		耕作		山林		家畜	
六 一 歳 以 上	六 〇 歳 一 六 歳	一 五 歳 以 下	臨時雇(延)	田	畑	山	豚	雞	畜
男 一 人	一 人	一 人	七〇日	一 反 六 畝	一 町 四 反	六 反	三 頭	一 〇 羽	
女 一 人		三 人							

主人は技術員として二百日以上出勤し家業に従事する日数は百日以内である。従て主任となつて労働するのは妻である。父母は七十を越へた老体なれば子供の守或は家畜の世話位である。尙臨時雇は七月から十一月迄の期間であつて給料は食費主人持ちで七、八、九月は一日四十五錢他は五十錢である。

(二) 栽桑及養蠶狀況

桑園反別		用途		肥料		小作料		養蠶	
全畑に對する割合	四反	春秋兼用	一〇〇%	購入	豆	麥	掃立量	春	初秋一晚
	二反	其他	自給	100%	五斗	一石	全收購量	框製八枚	框製四枚
								三八	二二七〇〇
									二〇五〇〇

附近には水田少く而も一毛田なる關係上畑地は麥作其他の栽培に宛てられ桑園は比較的少く三割に満たない従て養蠶も小規模で殆んど妻一人で五齡期に臨時雇をする丈である初秋蠶は長女が休暇であるので全く臨時雇の必要ない。本年は春蠶期の收購量が稍少いが之れは桑園に凍害のあつた爲めである。

(三) 耕種及花卉園藝養畜山林の狀況

耕種	反別		生産物	花卉園藝	反別		生産物	養畜	頭數	生産物	反別	山林
	反	別			反	別						
稻	一反六畝		一石四斗	牛蒡採種	二反		三頭	仔	四頭	六反	下草一二〇貫 落葉七二〇貫	
陸稻	三反		一石八斗	大根採種	一反三畝		二石	豚	一頭			
麥	五反八畝	小麥	四五石	白菜採種	五畝		四石五斗	雞	一〇羽			
甘藷	二反五畝	麥	一五〇貫	草花	三畝		七〇〇貫					
		苜蓿	一五〇貫	トマ	三畝半							
		苜蓿	一五〇貫	瓜原々	一反一畝							
		苜蓿	一五〇貫	種採種其他								

米麥作の外に花卉園藝を加へ殊に蔬菜の採種作業を多分に加へて經營し其他養畜山林をも行ふて多角的なる點に於て其の類例を見ない。

採種・花卉類は農事組合員は共同して商店との特約によつて取引されて居る。

二、收入及支出

收入は主産物は勿論副産物等總て生産當時の價格に見積つて計算し支出は自家勞力以外のものを總て合計して生産費を算出したのである。従て收入と支出の差額は從業者達の收入となるべきものである。

	收入	支出	差引	備考
(イ) 栽桑	一六四〇	一六〇〇	四〇	春蠶ハ一駄二圓 秋蠶一貫五錢
(ロ) 養蠶	二二七、五四	一五四、一四	八三、四〇	
(ハ) 耕種	四七三、二五	三二六、二五	一四七、〇〇	
(ニ) 花卉園藝	八〇三、五〇	二六四、二五	五三九、二五	
(ホ) 養畜	三七八、〇〇	二二一、六五	一六六、三五	
(ヘ) 山林	二二、八〇	九、八四	一二、九六	
計	二〇三一、四九	一〇八二、一三	九四九、三六	

三、勞力分配狀況

一箇年間に於て全勞働日數を一〇〇として作業別に調査して其割合を示せば次の通りである。

栽桑	養蠶	耕種	花卉園藝	養畜	山林	計
七	二八	二八	二五	八	四	一〇〇

次には一ヶ年間の農事の繁閑を調査して最も多忙な十一月を一〇〇として他の月の割合を算出すれば次の通りである、十一月に斯様に多忙なる理由は牛蒡、白菜、大根等の採種が一時的に行はれる関係である。

月別	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
割合	三三	二二	二五	五二	八〇	七九	九二	八〇	七五	五七	一〇〇	四三

四、摘要

- (一) 水田少く畑作物の多き關係から農業の經營は極めて複雑であつて養蠶は僅かに一少部分に過ぎない。
- (二) 自給肥料は家族八人と親豚三頭仔豚四十餘頭雞十羽及び山林六反歩の落葉等であつて甚だ豊富である。從て購入肥料は豚の飼料として大豆粕を購入する他僅かに配合肥料を購入するに過ぎない。
- (三) 収入の中最も多いのは花卉園藝であつて養蠶栽桑は其の収入甚だ少いが之れは桑葉繭等の暴落の爲めであつて例年は常に養蠶が主位を占めて居たのである。
- (四) 労働に對する報酬の最も多いものは園藝である。然しながら組合其他の團體によつて共同して特約栽培する場合に限つて有利の様である。
- (五) 一箇年間の勞力の分配最も合理的であつて夏期の間は繁閑少く冬期多少餘力があるが之れは温床其他の速成栽培を行ふ事になつて居る。

- (六) 之の一家は總て小作であつて山林に至る迄下草落葉等を取る爲めに小作して居るに過ぎない、殊に宅地に於ても小作である。
- (七) 反當の収入の多額な事は他に類例を見ないのである。從て最近は經濟豊となつて年々家運は隆盛となつて居ると云ふ。

實例二

一、經營概況

大里郡大幡村 島 田 氏

(一) 家族及耕作狀況

家族		耕作		山林		家畜	
従業員	非従業員	田	畑	山	林	牛	雞
男 二 女 二	男 一 女 二	九反三畝	九反四畝	—	—	一頭	一〇羽
常雇人	臨時傭(延)						
男 一 女 一	男 一 女 二						

主人は公務の爲め三、四、六、七、の四箇月は農事に従事するの暇なく妻は養蠶期に於ては主任として従事するも他は家に居て子守其他の家事に従事す。臨時傭は春蠶、晩秋蠶及び田植時季に雇入れたり。

(二) 栽桑及養蠶狀況

桑園		養		養		養		
反別	用途	肥	料	小作料	掃立量	春	初秋	
桑園反別 全畑に對する割合	九反 九反 其他	春秋兼用	100% 自給	七斗 三斗	麥一石 豆五斗	全收繭量 一四二七五匁	繭量二匁 二枚 平附五枚 三〇匁八三〇匁	平附一八枚 九七匁四〇〇匁

水田は二毛作なれば麥作は水田のみにて充分である關係から畑は殆んど全部桑園で他には自家用の蔬菜甘藷等を栽培するために三畝歩の畑があるに過ぎない。

初秋蠶は例年作柄の關係から最小限にして晩秋蠶に力を注いだ經營である。

(三) 耕種及養畜加工狀況

耕種	反別	生産物	養畜		加	生産物
			頭數	生産物		
稻	九反三畝	七匁	一頭	使役 三〇日	皆川莖	
麥	八反	小麥 三五匁 裸麥 九匁	二頭	卵 一三五〇匁		
馬齡薯	一反	四〇〇匁				
甘藷	三畝	二〇〇匁				六〇〇匁

栽桑養蠶以外は米麥作だけで其の外には僅かに水田裏作の馬齡薯があるに過ぎない役牛は朝鮮牛であるので体重も軽く厩肥の生産量も少い。

其他皆川莖は一昨年は大々的に行つて共同販賣したが本年は價安くなり従て一般に減少する傾向である。

二、收入及支出

收入は主産物は勿論副産物等を總て生産せられたる當時の價格によつて計算し、支出は自家勞力以外のものを總て合計して生産費を算出したのである。

收入、支出の差額は一家の勞働報酬、經營報酬の合計であると考へる事が出来る。

	收入	支出	差引
(イ) 栽桑	四〇二四六〇匁	三二八〇〇〇匁	七四六六〇匁
(ロ) 養蠶	八〇四、七二	六九六、九二	一〇七、八〇
(ハ) 耕種	七四三、二五	四八六、五四	二五六、七一
(ニ) 養畜	一五一、八〇	九一、九五	五九、八五
(ホ) 加工	二七、〇〇	九、八〇	一七、二〇
計	二二二九、三七	一六一三、二一	五一六、一六

三、勞力分配狀況

一ヶ年間に於て全勞働日數を一〇〇として之れを作業別に調査した結果は次の様である。

種	類	栽	桑	養	蠶	耕	種	養	畜	加	工	計
割	合	一	二	四	六	三	五	三	三	四	一	〇〇

次には一ヶ年間の農事の繁閑を調査して最も多忙である五月を一〇〇として他の月を算出すれば大略次の様である。

月別	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
割合	一	三	二〇	二三	一〇〇	七二	五五	四〇	六三	四六	三五	二三

四、摘 要

- (一) 水田と畑との耕作反別は殆んど同じで畑作としては桑園が大部分であつて他は僅かに自家用の蔬菜を栽培して居るに過ぎない。
水田は二毛作であるから米、麥は自家用の外に相當の餘裕がある。
- (二) 自給肥料は家族七人と牛一頭雞十羽から生産されるものだけであるから之だけでは一町八反歩の耕作地に對し不充分であつて一ヶ年間に百六十圓内外の肥料が購入されて居る。
- (三) 耕種と養蠶の収入は相半して居て兩者の合計は總収入の七割以上を占めて居る然しながら労働所得の場合

- (四) は總額の五割は耕種によるものであつて養蠶による労働所得は僅かに二割に過ぎない、之の理由は初秋晩秋雨蠶期の繭價暴落による収入減のためである。
家族の労働に對する報酬は養畜の場合に割高であつて次は耕種栽桑加工の順であつて養蠶の場合が最も割安になつて居る。
- (五) 一年中で最も農繁期は五月であつて六七八九十月は相當に忙しく一二三四月の四ヶ月最も農閑期である。

三、養畜養雞を加えたる養蠶の實例

實例一 (養豚と養蠶)

兒玉郡藤田村 長谷川氏

一、經營概況

(一) 耕作及養畜狀況

實數 割合	家		族		常雇人	耕	地				山林	家畜	
	六〇歳以上	一五歳未満	一五歳以上	一五歳以下			桑園	畑地	水田	計			
	男	女	男	女									
	二	二	一	一		八	八	〇、六	〇、五	九、一			
	女	男	男	女				六、五	五、五	一〇〇			
													八

備考 六〇歳未満一五歳以上の家族は總て勞役に従事して居る。但し四人を合計したる勞働能力は二人半と見て可である、一五歳以下の五人は全く勞働に従事しない尙勞力としては養蠶に於て一ヶ年延人数八〇名を雇用した豚の數は一ヶ年通じて絶えず増減があるが表中の數字は昭和六年一月二十日現在のものとす。

(二) 桑園及養蠶の狀況

用途別に依る桑園反別	桑園の所屬		產	額		料		代				
	春蠶	秋蠶		計	肥	自給費						
主用	主用	兼用	計	自作地	小作地	春蠶	夏秋蠶	晚秋蠶	計	購入費	自給費	計

實數	割合	實數	割合	實數	割合	實數	割合	實數	割合	實數	割合
100	八、〇	100	八、〇	100	八、〇	100	二、〇	100	六、〇	100	二、五
100	八、〇	100	八、〇	100	八、〇	100	二、四	100	二、八	100	一、四
100	八、〇	100	八、〇	100	八、〇	100	二、八	100	二、五	100	一、四
100	八、〇	100	八、〇	100	八、〇	100	二、八	100	二、五	100	一、四

備考 表中の桑園の中一段歩を賣桑となした産繭額は上繭のみを記入した。

肥料代の欄にて購入費一〇圓は石灰の代金、自給費の殆んど大部分を占むるものは豚肥、蠶糞、蠶沙であつて豚肥一貫匁一錢蠶糞、糞沙の混合しあるものを一貫匁一錢として見積つた、而して一段歩の施肥量は豚肥六〇〇貫、蠶糞一二〇貫とす。

二、養豚と養蠶の關係

(一) 養蠶による副産物の養豚に對する利用

養蠶による副産物としては蠶糞、蠶沙、廢桑、桑條、斃死蠶、自家製絲に依る蛹收繭後簇殻等を擧げ得れ共之等の中擇豚に利用せるものは僅かに簇殻のみであつて之が數量三〇〇貫價格にして一三圓五〇錢を豚舎の敷藁として利用した。而して該簇殻は購入糞(製簇用を含む)六〇〇貫價格七圓の五〇%に達して居る。尙桑園間作として菜類を一段三畝栽培し二五〇貫採り之れが見積價格二圓五〇錢とし中五畝歩即ち九二錢を豚に利用したり。故に養蠶に依る副産物の養豚に對する利用總額は四圓四二錢である。

(二) 養豚に依る副産物の養蠶に對す利用

養豚に依る副産物としては豚肥のみであるが總生産量四、八〇〇貫にして桑園に利用せるもの四、五〇〇貫之が見積価格四五圓とし殆んど大部分を養蠶に利用して居る。

三、養豚経営收支

(昭和五年度)

金額		種目	金額		種目
收	入		支	出	
一、〇〇〇	仔一頭賣却代	一、〇〇〇	豆粕代	一、〇〇〇	一月
一、二〇〇	仔二頭代但し生後四十日もの種付料として貰ひ受けたるもの	一、三〇〇	米糠代	一、二〇〇	一月
一、七〇〇	仔三頭代但し生後四十日もの種付料として貰ひ受けたるもの	二、七〇〇	牝一頭代	一、一〇〇	一月
二〇、〇〇〇	中豚一頭代	三、二、五〇〇	牝一頭代	一、一〇〇	二月
六〇、〇〇〇	種付用牝一頭代	五、六、〇〇〇	牝一頭代	三、三〇〇	三月
五五、〇〇〇	親牝一頭代	九〇、〇〇〇	米糠七五俵代	三、三〇〇	三月
九七、〇〇〇	仔一四頭代但し自産	四七、八〇〇	牝一頭代	四、四〇〇	四月
六、〇〇〇	仔一頭代自産	二、三、一〇〇	米糠二一俵代	四、四〇〇	四月
三八、〇〇〇	中牝一頭代	三、二、〇〇〇	牝一頭代	五、五〇〇	五月
二一、〇〇〇	仔三頭代種付料として貰ひ受けたるもの生後四十日	三、五、〇〇〇	牝一頭代	七、七〇〇	七月
二五、五〇〇	種付料として現金にて貰ひ受くる種付料として貰ひ受けたる仔二頭代	一、七、〇〇〇	種豚一頭代	六、六〇〇	六月
一三、〇〇〇	種付料として貰ひ受けたる仔二頭代	六、八、〇〇〇	豆粕代	九、九〇〇	九月
八五、〇〇〇	仔五頭及牝一頭代	三、八、〇〇〇	米糠四〇俵	一、二〇〇	十二月

六九、五〇〇	仔六頭代(自家生産)系統證明付のもの	一、一、〇〇〇	米糠七俵代	一、二〇〇	二月
五八、〇〇〇	自家生産の仔九頭代	一、五、〇〇〇	種付料	一、二〇〇	二月
四六、〇〇〇	牝一頭代	五、〇〇〇	飼料箱代	不詳	二月
三二、〇〇〇	仔五頭(自家生産)代	二、〇〇〇	蠟取紙	不詳	二月
		三、五〇〇	消毒藥品代	不詳	二月
		二〇、〇〇〇	畜舎修繕費	不詳	二月
合計 六六六、〇〇〇		五三九、一〇〇			

差引収入一二六、九〇〇 其他豚肥四八圓の収入あり。

四、摘要

(一) 本調査に於ては養蠶に依りて生ずる副産物の養豚に對して利用せらるゝものとしては甚だしく簇殻及桑園間作の菜類であつて金額に見積り總額四圓二〇錢であるが養豚に依る副産物は豚肥の見積価格四八圓中桑園に利用せるもの四五にして殆ど桑園八反歩肥料代は自給し得たり。

(二) 加之該桑園は年々七〇〇貫内外の收穫を擧げ未だ萎縮病に罹りたることなしと云ふ。

(三) 更に養豚自体の收支關係を見るに相當の現金収入がある。

(四) 以上の結果より推す時は養蠶と同時に養豚を行ひ豚肥を桑園に利用すれば肥料代を軽減し得ることが大である。

實例二一 (養雞と養蠶)

一、經營概況

入間郡日東村 内 田 氏

(一) 耕作及養雞狀況

實數 割合	家		族		常雇人		耕		地		山		林		家禽
	六〇歳以上	六〇歳未満 一五歳以上	一五歳以下	男	女	桑園	畑地	水田	合計	山林	原野	雞			
女一	男一	女二	男三	女一	桑園	畑地	水田	合計	山林	原野	雞				
二	四	一	三	一	七〇、六	五、〇	二九、四	一七、〇	一〇〇	一	一	二〇〇			

備考 六〇歳以上の女一人は労働能力なし一ヶ年を通じて絶えず労働に従事するものは家族の中男一人女二人及常雇人全部である。尙臨時雇用人は一ヶ年の延人数八〇〇人(男三〇〇人)であつて蠶種製造に使用した。

(二) 桑園及養蠶狀況

實數 割合	用途別に依る桑園反別			桑園の所屬		産		額		肥		料		代
	春蠶 主用	夏秋蠶 主用	兼用 春秋	計	自作地 小作地	春蠶	夏秋蠶 晚秋蠶	計	購入費	自給費	合計			
七、〇	五、〇	一	一二、〇	一二、〇	七〇	三〇	五〇	一五〇	四〇	八五、三	一二五、二			
五、三	四、七	!	一〇〇	一〇〇	四六、七	一〇、〇	三三、三	一〇〇	三三、〇	六八、〇	一〇〇			

備考 本調査の繭は蠶種を製造し卵量七八疋を産した蠶種製造用の繭は表中に記入しない而して表中の收購

量は上繭のみを記入して居る。

肥料代の欄で購入費の全部を占むるものは「カリホス」であつて自給肥料は雞糞蠶糞大部分を占め一段當施肥量は蠶糞一五〇貫雞糞一二〇貫「カリホス」一呎であるこの他自家製絲に依る蛹等を桑園に肥料とし施すが其の量僅少であつて一町二段の桑園に施さるゝもの合計一六貫に過ぎない。尙肥料代欄自給費に入るものは蠶糞一二〇〇貫價格にして一二圓雞糞一八〇〇貫價格にして七三圓一二錢である。

二、養雞と養蠶との關係

(一) 養蠶に依る副産物の養雞に對する利用

養蠶に依る副産物として養雞上利用せらるゝものは全くない。

(二) 養雞に依る副産物の養蠶に對する利用

雞糞のみであつて之が總生産量一八〇〇貫價格にして七三圓一二錢である全部を桑園に施した。養雞を始めたる動機は養雞講習に出席し其利あるを悟り初め小敷を飼つたが相當の利益があり尙且勞力少くして足り養蠶に支障を來す憂なく副産物たる雞糞を桑園に施用するに桑園能率を擧げ得た其後漸次羽數を増すに至つて桑園肥料は殆んど自給の状態となつた。ただ蠶種の製造をなし居る關係上燐酸に富める桑を得るが爲め「カリホス」を別表の如く施用するに過ぎない經驗に依れば雞糞の生産量は「レグホン」種一羽一ヶ年を通じて八貫一九貫であるから一段歩の桑園に對し雞二〇羽ある時は肥料は自給し得、依つて今後も肥料自給を程度と

し養雞を續行する考である。

(三) 養雞の收支

點燈養雞法を採り一ヶ年産卵せしめたるものは肥育して所謂潰雞として賣却する飼料は殆んど全部他より購入し一日一羽の飼料代五厘を最高限度として經營して居る。而して生産物たる卵及潰雞は組合員數一二人を有する日東養雞組合を組織し販路を東京市に求め共同出荷をなして賣却する今昭和五年度の現金收支を表示すれば次の如くである。

現金收支

收		入		支		出	
四二五、〇〇	卵	二五〇貫代	三六四、〇〇	飼料代			
七六、五〇	潰し雞	一〇〇羽代	二〇、〇〇	雞舍修繕費點燈費消毒藥品代			
計五〇一、五〇			三八四、〇〇				
差引現金收支		一三七、五〇					

三、摘 要

(一) 二〇〇羽内外の養雞に於ては養雞多忙期に於ても支障を來すことがない。
 (二) 養雞に依る副産物の養雞に對する利用は皆無であるが養雞に依る副産物であるところの雞糞は其の數量莫

大であつて二〇〇羽に對し一ヶ年總生産量一八〇〇貫之が價格七三圓一二錢其の全部を桑園に施す爲め施肥代の輕減をなし得、而して該桑園の能率は植付後五年にして段當收穫量六〇〇貫である。

(三) 更に他方桑園肥料としての雞糞を除外した現金收支に就て見ても利潤が相當にある。

(四) 故に養雞の傍養雞をなすは桑園肥料經濟及養雞資金の圓滑なる融通を計る上に於て利あるものと認める。

實例三 (養牛及養雞と養蠶)

大里郡奈良村 小 島 氏

一、經營 概況

(一) 耕作及養畜禽狀況

實數	家 族		常 雇 人		耕 地		地		山 林		家 畜 禽	
	男	女	男	女	桑園	畑地	水田	合計	山林	原野	雞	牛
割 合	六〇歳以上	六〇歳未満一五歳以上	一五歳以下									
	一	三	二	一	六、〇	一、三	六、三	一三、六	一、六	一	一〇〇	一

備考 六〇歳未満一五歳女三人の中一人通學暑中休暇以外勞働に従事しない他に女二人は勞働能力四男二人勞働能力七常雇人勞働能力七を有する。

他に養蠶期の臨時雇延一〇人

(二) 桑園及養蠶狀況

用途別に依る桑園反別	春蠶		夏秋蠶		計	桑園の所屬		産		額		肥料		代
	主用	兼用	主用	兼用		自作地	小作地	春蠶	夏秋蠶	計	購入費	自給費	計	
實數	—	—	—	—	六、〇	六、〇	—	六二	一七四、五〇〇	二二、五〇〇	八七、九六	二八、〇〇	二五、九六	
割合	—	—	—	—	100	100	—	四九、八	一三、九	三六、三	100	七五、九	二四、一	100

備考 殘桑三〇〇貫を生じた夏秋蠶の收購量の少いのは火山灰の被害に依る、購入肥料は過磷酸石灰、大豆

粕硫酸アンモニア(綠肥の入りたるところには石灰窒素)硫酸加里石灰、自給肥料の主なるものは雞糞牛肥であつて之等肥料の一段當施肥量は次の如くである。

過磷酸石灰六貫、大豆粕二〇貫、硫安一貫(綠肥を入れたる場合には石灰窒素一〇貫)硫酸加里四貫 石灰一〇貫、雞糞五〇貫、牛肥二〇〇貫。

二、養畜禽と養蠶との關係

(一) 養蠶に依る副産物の養蠶に對する利用

養蠶に依る副産物の家畜禽に利用せられるものは籾殻一五〇貫見積價格一圓八〇錢(利用價值に依り同量の敷糞の價格より見積り)が牛舎に入れらるゝのみであつて其の他は皆無である。

(二) 家畜禽に依る副産物の養蠶に對する利用

本項に入るべきものは雞糞、總生産量の約三割即ち三〇〇貫價格にして一六圓畜牛よりは牛肥總生産量の約

三割一、二〇〇貫價格にして一二圓が桑園に利用せらるゝため合計二八圓の肥料代を自給し得た。牛は桑園の耕耘に使用する意嚮あるが現今設定しある桑園は畦間五尺株間二尺五寸にして牛耕に不適であるため全く使役しない。

三、養畜禽の收支

雞の部

收入 卵 肉 代

五〇三圓七〇錢

支出 飼料代

二七九圓九一錢

雞舎修繕費其他

一五圓〇〇錢

差引收入

二〇八圓七九錢

牛の部

殆んど全部自給自足であつて現金を以てする收入支出がない。

四、摘 要

- (一) 雞一〇〇羽牛一頭の飼養では養蠶期の勞力に支障を來す憂がない。
- (二) 養蠶と養雞との關係に於ては雞糞が桑園肥料として利用せらるゝのみである。
- (三) 役牛の畜力が桑園に對して利用せられると見るべきは耕耘のみであらうが本調査に於ては桑園の牛耕を行

- (一) はないため牛肥のみであつて之れが總生産量三六〇〇貫の三分一即ち一二〇〇貫見積價格一二圓である。
- (四) 役牛の畜力に就ては調査困難であつて本調査には擧げ得られなかつたが耕勸効程は成牛一頭及人二人にて四人分に該當する様である。
- (五) 本調査の結果に依れば役牛を飼養することは大規模養蠶に於て桑園の耕耘を畜力によるか或は多角的養蠶經營に依り他に勞力を充分利用し得る場合の外利益が少いものと認む。

實例四 (養馬養豚と養蠶)

北葛飾郡吉田村 鈴木氏

一、經營概況

(一) 耕作及養畜狀況

實數	家		族		常雇人	耕		地		山林		家畜(家禽)		
	女	男	以上六〇歳	六〇歳未満		桑園	畑地	水田	合計	山	林	雞	馬	豚
割合	女一	男二	以上一五歳	一五歳以上	男一	女一	七、〇	四、〇	一五、〇	二六、〇	—	—	—	—
實數	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

備考 六〇歳以上の女一人は勞働しない六〇歳未満一五歳以上男二人の中一人は學校教員の爲め勞働に従事しない。

(二) 桑園及養蠶狀況

實數	用途別に依る桑園反別		桑園の所屬		産		繭		額		肥料		代
	春蠶	夏秋蠶	自作地	小作地	春蠶	夏秋蠶	晚秋蠶	計	購入費	自給費	計	計	
歩合	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

備考 産繭額は上繭のみを記入した肥料代中購入費に入るべきものは過燐酸石灰、硫酸アンモニア、硫酸加里、大豆粕であつて大部分化學肥料を施した。自給費中に入るべきものは厩肥、豚肥であつて兩者合計二、七〇〇貫を施した。

當地方は腐植質に富み肥料の保持力も大である爲め從來迄金肥萬能主義を以つて一貫したが最近地力保持の必要と繭價低落とにより肥料代の節減を圖らんが爲め最初附近の土堤等に於ける野草利用の目的を以て豚を飼養したが之が利益相當額に上るに依り漸次規模を擴張するに至つた。馬は水田、畑作の耕耘を目的として飼養した。

二、養畜と養蠶との關係

(一) 養蠶に依る副産物の家畜に對する利用

簇殻の二〇〇貫價格にして二圓六〇錢(同量の藁代に換算す利用價值の上より同等視す)之を馬の敷糞として利用した。尙製簇の際の屑糞は柔軟であるから仔豚をさる際の褥藁として絶好のものである之が數量二五貫

見積価格五〇錢である、

(二) 家畜に依る副産物の養蠶に對する利用

馬及豚に依つて生産せらるゝ厩肥の總生産量八、〇〇〇貫(馬四、五〇〇貫豚三、五〇〇貫)中馬肥一、四〇〇貫豚肥一、三〇〇貫を桑園肥料として利用して居る。即ち桑園に利用せらるゝ額は二七圓である。

三、養畜の收支

馬は殆んど自家生産の飼料を以つて養ひ購入飼料なし、又馬に依りて生産せる厩肥、勞力等を現金に換へたることがないため收支は不明である。豚に依る現金収入は三〇〇圓であつて其中支出一〇〇圓(勞力を除く)差引二〇〇圓の現金収入となつた。

四、摘 要

- (一) 馬一頭、豚五頭の飼養に要する勞力は左程大きくはない。又養蠶期の勞力に支障を來すことはない。
- (二) 養蠶に依る副産物中馬、豚に利用せらるゝもの甚だ少ないが馬豚の副産物として厩肥が桑園に利用され肥料代の節減をなし得たことは大きい。
- (三) 馬に依る現金収入は少なけれども畜力を他の耕作に利用したゝめ普通農事に養蠶を組合せ多角的に經營するものにあつては馬の飼養は經營上都合良し。
- (四) 養豚はそれ自体の収入も大なるため獨り養蠶のみをなすものにとつても飼養して利あるものと認める。

實例五 (緬羊飼育と養蠶)

群馬縣佐波郡 鳥 村 某

群馬縣佐波郡鳥村は養蠶並に蠶種製造盛なる所であるが最近養蠶の傍ら緬羊の飼育をなし相當の利益を擧げ居るものがある如何にして養蠶家が緬羊を飼育するに至つたか又如何なる方法を探つて居るか即ち緬羊飼育と養蠶の關係につき某氏に照會せる大要次の如くである。

問 緬羊飼育の動機は?

答 利根川に近き爲め生草を豊富に得らる所に偶々縣より緬羊飼育の利あるを聞き數年前試みに飼養せるに成績良く飼料としては養蠶の副産物たる殘桑、蠶糞等を好んで食するに依り其後繼續して飼養して居る。

問 何故に養豚をなさず緬羊飼育をなすや。

答 養豚にては普通農業を行はざる者は飼料の購入に莫大の支出をしなければならぬ。又價格の變動多き爲め困却す然るに緬羊飼育に於ては飼料費少く且つ桑の葉が最好飼料である。

問 緬羊の缺点としては?

- 答 一、生産率悪し、受胎率は七六%であるから良好であるが年一頭―二頭を産むに過ぎない。
- 二、濕氣ある場所では腰痠痺を起して斃る高乾の地に適し且つ暑熱に弱い。
- 三、運動場を相當廣く要する即ち二頭にて一坪の畜舎及一頭に對し二坪の運動場を必要とする。

問 桑葉が最良の飼料にては養蠶の傍ら飼ふには不適當ではないか。

答 緬羊に與へるものは晩秋蠶後結霜前に於て殘桑を摘採し之を蔭乾し貯藏し置く故養蠶の爲めの桑葉には差支がないのみならず桑園の清潔を保ち得て害蟲の發生を豫防し得らるゝ様である。

問 緬羊の飼料は如何。

答 夏季に於ては利根川岸より生草を刈取り與ふ又養蠶期には蠶糞を乾燥して供し冬は桑園に間作せる胡蘿蔔を少量與ふれば可である。

問 桑園一段歩の廢桑で飼養し得る頭數は？

答 一段歩にて一頭又は二段歩にて一頭の割合である。

問 羊毛の年産額は？

答 一年一回四月中旬に刈るものであるが一頭の生産量は体重に依つて異なるも八〇〇匁—一貫五〇〇匁内外である。昭和五年に於ける一ポンドの價格は一圓八〇錢であつたゝめ普通の大きさのものにて七圓内外の羊毛を産する。

問 其の他の利益としては？

答 仔羊一年一頭生産するものとして賣却する故確たる値段は知らないが相當高額に上るものと認める。

問 種牡と牝との數の割合は？

答 牡一頭對牝三〇頭で可である。

問 羊肥を桑園に利用し得る程度。

答 現在二町歩の桑園を有し羊七頭を飼養して居るが桑園肥料は全部羊肥を以て自給して居る。畜力利用の關係から緬羊は一町歩以内の耕地を經營し居るものに有利であつて一町歩以上では牛馬の方が利が大きい。

問 如何にして緬羊を求めしや。

答 五名五頭以上の條件にて北海道瀧川種羊場へ申込み購入した。

問 羊毛の販路は？

答 東京南千住陸軍製絨所。

問 農林省より補助ある由であるが如何。

答 羊一頭購入に際し三圓毛一磅に付四〇錢の獎勵金の交付がある。

以 上

四、桑園に間作を行へる實例

實例一 (間作物馬鈴薯)

比企郡大河村 野口氏

一、經營概況

(一) 家族及び耕作狀況

實數	家		族		常雇人	耕地	畑	田	反別計	山林	原野	牛	馬	豚	雞	兔	數
	男	女	六〇歳以上	二五歳以下													
實數	四	一	一	一													
割合	四〇	一〇	五〇	一〇													

家族は主人以下四人が勞役に従事す、桑園は自家用桑葉を生産し畑地は副食物又は販賣用蔬菜、タモ(トロ、アフヒ)等を栽培する。

田作は最も多く米麥を相當に販賣する、山林は薪炭用雜木或は落葉を收穫し其他雞、兔等は廢物を以て飼養し多少の收入がある。

(二) 桑園及び養蠶狀況

桑園	用途別桑園反別計	桑園肥料代(反當)計		自作小作	產	額
		春蠶	夏秋蠶			
普通桑園	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
主間作其他間作桑園	五	五	五	五	五	五
計	一五	一五	一五	一五	一五	一五
主用	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
主用	五	五	五	五	五	五
計	一五	一五	一五	一五	一五	一五
購入費						
自給費						
計						
桑園						
桑園						
春蠶						
夏秋蠶						
計						

實數	割合	實數	割合	實數	割合	實數	割合
一〇	四〇	一〇	四〇	一〇	四〇	一〇	四〇
一〇	四〇	一〇	四〇	一〇	四〇	一〇	四〇
一〇	四〇	一〇	四〇	一〇	四〇	一〇	四〇
一〇	四〇	一〇	四〇	一〇	四〇	一〇	四〇
一〇	四〇	一〇	四〇	一〇	四〇	一〇	四〇
一〇	四〇	一〇	四〇	一〇	四〇	一〇	四〇
一〇	四〇	一〇	四〇	一〇	四〇	一〇	四〇
一〇	四〇	一〇	四〇	一〇	四〇	一〇	四〇
一〇	四〇	一〇	四〇	一〇	四〇	一〇	四〇
一〇	四〇	一〇	四〇	一〇	四〇	一〇	四〇

主間作桑園とは調査せる間作物を栽培せる桑園である。

桑園は主として春秋兼用なるも多少の條桑伐採式の夏秋蠶主用のものがある。

肥料代の購入費は完全肥料一五貫内外、自給費は堆肥三〇〇貫(單價一錢)で蠶繭は桑園の面積に比し多收し反當三〇貫餘である。

如上の狀況により一家に於ける販賣所得となる生産物は蠶繭、薪炭用雜木、米麥、間作物其他の蔬菜類、雞卵及び家兔等主なるものである。

二、間作狀況

(一) 間作桑園の狀態

間作物の種類	地形	土質及肥瘠	桑品種	仕立方	採葉形式	植付距離	樹齡	桑樹の發育狀態
馬鈴薯 (アメリカン オンダー)	平坦地	輕埴土 (ノツベ土)	黒コボレ	中刈	春秋兼用	株間三、〇尺 畦間四、五尺	二〇年	中庸春十二駄内外 收葉程度
其他 (タモ、インゲン)								

(二) 桑と間作物との関係

イ、桑の發育と間作物との関係

春桑の發育に別状なく春蠶期刈取後間作物は桑株を覆蓋することあるも土寄せを行へば桑に障害することはない。桑の發育は春十畝内外程度を最も適當とし、それ以上に繁茂すれば間作物に不適當である。地方は堆肥給與に依り毫も減退することはない。

桑園の畦間は四五尺又は五尺を適當とし夫れより廣狹何れにせよ生産能率を低下せしむる恐れがある。

ロ、桑園の障害と間作物との関係

間作物は凍害を被ること少きも桑には何等の影響を認めない尙間作物に寄生する二十八星瓢虫は体硬化し白粉を被りて斃死するもの三四割で畑地に栽培する作物に於てはかゝる病死虫を認めない。

ハ、間作物の有無が桑園の管理上に及ぶ影響。

別に不便を感じるることなく却つて雜草は繁茂せなければ之が節約さるゝのである。

三、收支計算

イ、収入の部

(反當)

品目	種別	數量	單價	價額	販賣別	摘	要
馬鈴薯	地下莖(芋)	400	0.9	360.00	自家消費(七分)		自家消費は副食又は兔飼料となし時に依り肥料となす
同	地上莖(綠肥)	600	0.2	120.00	自家消費		綠肥として畦間に鋤込む
計				480.00			

ロ、支出の部

(反當)

品目	種別	數量	單價	價額	購入別	摘	要
種苗代	馬鈴薯	200	0.9	180.00	自給		桑肥料は別に堆肥三〇〇貫完全肥料一五貫餘を施用せり
肥料代	完全肥料	100	3.0	300.00	購入		
	人糞	150	1.0	150.00	自給		
	馬鈴薯莖葉	600	0.2	120.00	自給		
勞力代	植付、手入、收穫	1人3人 1人5人	50	250.00	自給		
設備代				148.00			
計				1,080.00			

ハ、收支決算

(反當)

差引利益金二七、二〇圓

勞力代、肥料代(人糞尿)を加算せざる場合差引利益金三一、二〇圓

ニ、收穫物販路の狀況

近隣へ坪賣するもの約四割他は自家消費である、市場へ個人出荷も便利である。
ホ、市價變動の有無

變動は極めて著しい、概して先物高く中期最も安く收穫期以後再び高値に向く其差額は一貫匁七錢より二〇錢に亘り一三錢餘である。

四、摘 要

- (一) 間作栽培年数は二十五ヶ年であるが前記收支決算の如く有利である。
- (二) 收穫物(芋)は種芋用として販賣するのが有利であるが尙副食物、家畜飼料、肥料等に消費すれば收穫期の安値に脅さるゝ憂がない。
- (三) 肥料とするには煮たる芋十五貫乃至二十貫に麥糠五―六升を加へ更に水三―四斗を加注して良く攪拌し約二週間放置すれば醗酵腐熟するのである、之を五―六倍に稀釋して直ちに桑園又は畑地に施用するのである。
- (四) 土質は輕埴土(ノツペ)土又は之に類似する膨軟土を可とし砂礫地の如き固結地は適しない、肥料は堆肥を主眼とし人糞尿其他の液肥を追肥とするが良い。
- (五) 桑園は春秋兼用が有利である。夏秋兼専用は間作物の發育は良いが前者に比し生産能率低下する憂がある。桑園は五月中旬裾桑の伐採收穫を行ひ陽光の照射通風の透過を良好ならしむれば桑の發育稍優ぐれることも差支へない。

(六) 間作物の品種はアメリカンウオングー(中生種)が良い但し瘠地なれば早生種を選び然らざる地と雖も市場販賣用としては男爵(早生種)の如き美味のものが良い。

實例二 (間作物馬鈴薯)

入間郡鶴ヶ島村 岸 田 氏

一、經營概況

(一) 家族及び耕作状況

實數	家 族		常 雇 人		耕 作		山 林 原 野		家 畜						
	男	女	男	女	桑園	畑	田	計	山林	原野	牛	馬	豚	雞	兔
割 合	一	一	一	一	七	八	五	二	四	八	一	一	一	一	一
	二五	二五	二五	二五	四	二九	二七	一〇〇	一〇〇	一	一	一	一	一	一

家族は主人を初め男女二名宛四人は皆勞役に従事してゐる他の者は一人前の勞役に服することは出来ぬ、桑園は自家養蠶用で畑は穀菽類、蔬菜類を栽培し、田は米麥を作り自家消費以外の餘剰がある、牛は勞役用で豚は主として厨の雜物を以て飼養し肉用に販賣してゐる。

(二) 桑園及び養蠶狀況

桑園	用途別		桑園肥料代(反當)		自作小作		產 額	
	普通桑園	主間作其他間作桑園	春蠶	夏秋蠶	桑園	桑園	春蠶	夏秋蠶
計	計	計	計	計	計	計	計	計

實數	六、八 ^反	一、〇 ^反	七、八 ^反	三、〇 ^反	四、八 ^反	七、八 ^反	三、二〇 ^反	三、五〇 ^反	六、七〇 ^反	七、六 ^反	二 ^反	五、〇 ^反	七、〇 ^反	八、〇 ^反	二〇〇 ^反
割合	八七	一三	一〇〇	三六	六二	一〇〇	四八	五三	一〇〇	九七	三	二五	三五	四〇	一〇〇

四〇

主間作桑園とは調査せる間作物を栽培せる桑園である。

肥料代の購入費は完全肥料十貫で自給費は堆肥及豚肥三百五十貫(單價一錢)である。産繭額は反當二十五貫餘であるから成績良好と云ふべく秋蠶期が春蠶期に比し多いのは夏秋専用桑園があるためである。如上の状況により一家に於ける販賣所得となる生産物は蠶繭、米麥の一部、蔬菜の一部、薪用雜木、豚及び雞卵等主なるものである。

二、間作状況

(一) 間作桑園の狀態

間作物の種類	地形	土質及び肥瘠	桑品種	仕立方	採葉形式	植付距離	樹齡	桑樹の發育狀態
馬鈴薯	平坦地	輕埴土(ノツペ土)肥沃	魯桑	中刈	夏秋蠶用	株間四、〇尺 畦間六、〇尺 反當 四五〇株	七年	極めて良好なり

(二) 桑と間作物との關係

イ、桑の發育と關作物との關係

桑の發育には別狀なく馬鈴薯の莖葉を綠肥として施すため却つて良好である。間作物は發芽當時の桑株を覆蓋する程度に繁茂するが畦間廣きためその憂はない。

地力は堆肥を施せば減退することなく五ヶ年餘連作せるに向五萬尺餘の桑條を發生する程度である。畦間は六尺を適當とし中央に間作物を一條に植込むのが良い、然し五尺以下の時は桑の發育を阻害し、若し然らざる時は間作物の生産能率を著しく低下する。

ロ、障害と間作物との關係

桑には全く關係を認めざるも間作物は凍害の程度稍少ない傾向が認められる。

ハ、間作物の有無が桑園の管理上に及ぶ影響

夏期に於ける雜草は極めて少なく除草勞力を大いに節減し尙其頃行ふ土寄二回は極めて簡便に終り秋期の摘葉は堀取後なれば全く關係がない。

三、收支計算

イ、収入の部 (反當)

品目	種別	數量	金額		販賣の別	摘	要
			單價	價格			
馬鈴薯	地下莖(芋)	二八〇貫	〇、九	二五、二〇	一半自家消費	種芋として坪賣、又は副食、豚の飼料等なり	
同	地上莖(綠肥)	五〇〇貫	〇、二	五、〇〇	自家消費	綠肥として畦間に鋤込む	

計					100.10
---	--	--	--	--	--------

ロ、支出の部 (反當)

品目	種別	數量	金額		購入の別	摘要
			單價	價格		
種苗代	完全肥料	一五斗	〇、九	一、三五	自給	
肥料代	馬鈴薯莖葉	一〇貫	三、〇〇	三、〇〇	自給	桑肥料は完全肥料十貫、堆肥三五〇貫なり
勞力代	植込、手入、堀取	二八二八	八、〇〇	四、〇〇	自給	
設備代	古俵	二〇俵	三、〇〇	一三、九五	自給	實際は使用せず
計						

ハ、收支決算 (反當)

差引利益金一六、二五圓

勞力代、設備代を加算せざる場合には差引利益金二〇、八五圓

ニ、收穫物販路の状況

個人的の坪賣、市場出荷は價格の点に於て不利である。

ホ、市價變動の有無

變動著しい、概して收穫早期のものは高値で、後期に至り甘藷の出廻る頃最も安値となる。其の差額は一貫匁二十錢乃至八錢である。

四、摘要

- (一) 間作栽培年數は五ヶ年であるが前記收支計算の如く有利である。
- (二) 桑園は夏秋蠶専用とするのが良いが春秋兼用桑園とする場合は桑品種を早生種となし。春蠶期の收葉時期を早めに行ふが良い。
- (三) 肥料は桑と間作物との區別をする必要無く、堆肥豚肥の如き有機質自給肥料を多量に施し其他の速効性の金肥類を施用せぬが良い。
- (四) 五、六月頃に間作物に土寄せを行ひ芋を裸出せしめぬが良い。
- (五) 收穫物は種芋用として坪賣とするのが最も有利であるが、然らざる場合は副食物となし屑芋は家畜(豚)の飼料とするのが良い。
- (六) 間作物は連作しても何等影響がない。

實例三 (間作物、蒟蒻) 比企郡大岡村 新井氏

一、經營概况

(一) 家族及び耕作状況

實數	家		族		耕作	反別	計	山林	原野	家	畜	數
	男	女	以上	以下								
割	1	1	1	1								
合	2	2	2	2								

家族は主要勞力四人であるが中一人(女)は餘り手傳ふことがない。

耕作地は桑園最も多く畑田は少なく米麥蔬菜等の食糧を生産し山林は薪材、落葉等を生産する。

(二) 桑園及び養蠶狀況

實數	桑園		反別		用途別桑園反別		桑園肥料代(反當)		自作小作		產		額
	普通桑園	主間作桑園	其他間作桑園	計	春蠶	夏秋蠶	兼用	計	購入	自給	計	計	
割	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
合	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2

主間作桑園とは調査せる間作物を栽培せる桑園である。

桑園は養蠶用桑を生産するのみでなく、悉くに蒭蕪を間作し一部には柿樹を植栽して居る、肥料代の購入費は完全肥料十貫、自給費は野草百貫で産蒭額は反當十六貫餘である。

如上の狀況により一家に於ける販賣所得となる生産物は蠶繭、間作物(蒭蕪)柿果實等主なるものである。

二、間作狀況

(一) 間作桑園の狀態

間作物の種類	地形	土質及び肥瘠	桑品種	仕立方	採葉形式	植付距離	樹齡	桑樹の發育狀態
蒭蕪	傾斜地	壤土	改良早生文字	根刈	春秋兼用	株間三、〇尺 畦間六、〇尺	六年	中庸
其他樹			市平			反當六〇〇株		

(二) 桑と間作物との關係

イ、桑の發育と間作物との關係

桑の發育には別狀なく大概春十畝内外收穫せらるゝ程度が適當である。夫れ以上桑が繁茂すれば間作物の發育は不良となる。桑園内又は隣接して樗又は柿樹があると桑は八畝内外となり、他の作物は絶対に生育せぬが本間作物は相當に發育するのである。即ちこの間作物は發芽前後に陽光の照射を必要とするが盛夏の候に於ては却つて可成の陰地を適當とするのである。地力は有機質自給肥料の施與により毫も減退することはない。

桑園の畦間は六尺を適當とするがその限度は四尺迄は發育する、然しかゝる場合は玉の肥大成長遅くれキ

ゴ(一年子)の分蘖数も減少し生産能率が低下するのである。
 ロ、桑の障害と間作物との関係
 特に関係を認めぬ。

ハ、間作物の有無が桑園の管理上に及ぶ影響
 著しき不便を感じることもないが夏秋期の摘桑に不便である。然し中耕は省略せられ雑草は繁茂しないで大いに労力が節減される便利がある。

三、收支計算

イ、収入の部

(反當)

品目	種別	數量	金額		販賣の別	摘	要
			單價	價格			
蒟蒻	三年子	300	28	7,600	販賣	食用玉なり、一玉八十匁より二百匁餘あり。	
蒟蒻	一年子	25	100	2,500	自家消費	種玉にして時に販賣することあり。	
計				10,100			

備考 間作桑園中には柿樹六十本を植栽し(約五畝)之より約一萬五千個の果實を收穫して居る。更に乾柿として一個一錢内外に販賣すれば百五十圓内外の収入がある。かゝる場合は桑及間作物の収入は多少減するが販路の如何により相當有利である。(調査者)

ロ、支出の部

(反當)

品目	種別	數量	金額		購入の別	摘	要
			單價	價格			
種苗代	蒟蒻二年子(五一六千玉)	100	26	2,600	自給	一玉二十匁内外のものが最も有利なり。	
肥料代	完全肥料	40	26	1,040	購入	桑肥料は別に野草百貫完全肥料十貫施せり。	
勞力代	植込、手入、堀取	355	80	28,400	自給		
設備代	古俵	23	3	69	自給		取扱上南京米袋を可とす。
計				50,299			

ハ、收支決算

(反當)

差引利益金五〇、七一圓

勞力代、設備代を加算せざる場合差引利益金六一、八〇圓

ニ、收穫物販路の状況

少量であるため近隣の得意先へ個人出荷とする。従つて多量生産となれば共同して荒粉、精粉にして販賣するが有利である。

ホ、市價變動の有無

變動著しい、昭和五年は一圓に一、八貫一二、五貫（一貫目五十五錢一四十錢）で同六年は三、五貫一五、〇貫（一貫目二十九錢一二十錢）である。概して前期安値で後期高値となるが夫れも一律でない。

四、摘要

- (一) 間作物栽培年数は二十ヶ年であるが（最初三圓の種芋を購ふ）前記收支計算の如く有利である。
- (二) 收穫物は生玉でなく荒粉又は精粉として共同多量出荷するが良い。
- (三) 土質は固く膨軟ならざる壤土又は砂礫地を可とし輕埴土（ノツベ土）は良くない。尙排水可良であれば傾斜地とする必要はない。
- (四) 肥料は堆肥綠肥等の自給肥料を主とし他のものは補給する程度で良い。而して土表面に施し間作物の近くに行ふことは悪い。早害防止用に藁を使用するが絶対に使用せざるが良い。之は病菌助成となり收穫を皆無にすること尠くなく故に麥稈を代用するが良い。
- (五) 一年子（キゴ）は堀取ることなく其儘發育せしめ肥大せるもの（食用玉）より順次收穫するが良い。本方法は桑園乱れ收支計算（短年月に於ける）困難となる弊あるが真に有利である。若し一年一期とするには種玉として二年子を別地に栽培したるものを桑園間作とし三年子（食用玉）として販賣するのが有利である。
- (六) 間作物發芽前後の除草及び其後の乾燥の防止は特に行ふが良い。
- (七) 種芋の貯蔵は初心者において二階の竹ス床上に轉し置き使用するのが最も安全であつて土室貯蔵は失敗易い。
- (八) 種玉は購入せるものには不發芽多ければ注意をせねばならぬ。

實例四（間作物、蒟蒻）

一、經營概況

(一) 家族及び耕作狀況

實數	割合	家		族		常雇人	耕作反別	山林原野	山林原野	牛	馬	豚	雞	兔
		男	女	以上六〇歳	以下一五歳									
1	100	1	1	1	1	1	100	100	1	1	1	1	1	1
1	100	1	1	1	1	1	100	100	1	1	1	1	1	1

秩父郡金澤村 石井氏

(二) 桑園及び養蠶狀況

家族は勞役に従事するもの五人であるが時期により臨時雇人を使用する。耕作地は大部が桑園で畑地は穀菽又は蔬菜類を栽培してゐる。山林は雜木林で落葉を利用することが少くない。

實數	割合	桑園反別		用途別桑園反別		桑園肥料代（反當）		自作小作		產額	
		普通桑園	間作桑園	春蠶主用	夏秋蠶兼用	購入費	自給費	桑園	小作	春蠶	夏秋蠶
100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

主間作桑園とは調査せる間作物を栽培せる桑園である。而して該桑園は蒟蒻を主作とし副作として小麦を併作せるものである。

桑園は面積多いが蠶種製造用のもので夏秋期、晚秋期は賣桑する機会が多い。従つて産繭も反當八貫餘で極めて尠い。

如上の状況により一家に於ける販賣所得となる生産物は蠶種、蠶繭、桑葉の一部、穀菽類の一部、桑園間作物又は其他根菜類、雜木、落葉等主なるものである。

二、間作状況

(一) 間作桑園の狀態

間作物の種類	地形	土質及び肥瘠	桑品種	仕立方	採葉形式	植付距離	樹齡	桑樹の發育狀態
蒟蒻及び小麦 其他なし	平坦地	砂礫質壤土		中刈	春秋兼用	株間二、〇尺 畦間三、〇尺 (畦寄五、〇尺)	六年	中庸
中位						株反當 畦間 數 六三五株		

(二) 桑と間作物との關係

イ、桑の發育と間作物との關係

桑の發育に別狀なく蒟蒻の前作として小麦を栽培するためか蒟蒻の發育も却つて良好なる觀がある、尙樹

幹を五尺位にすれば桑と間作物の共に發育可良で畦間は寄畦式とし間作物の發育を助長せしむることが桑園の全能率を高むる上に必要がある。

ロ、桑の障害と間作物との關係

特に顯著なる關係を認めぬ。

ハ、間作物の有無が桑園の管理上に及ぶ影響

畦間廣いため摘桑其他に不便を及ぶことがない。唯除草は他の桑園に比し幾分多く行ふ必要あるが中耕は大いに節減される便がある。

三、收支計算

イ、収入の部

(反當)

品目	種別	數量	金額		販賣消費の別	摘	要
			單價	價格			
蒟蒻	三年子	二五〇	三七	六七、五〇	販賣	食用玉にして大形のものなり	
計				六七、五〇			

備考 蒟蒻の副作(前作)として小麦を收穫せり、其の收入數値は次の如し。

小麦數量二石 金額一六圓

ロ、支出の部

(反當)

品目	種別	數量	單價	金額	購給の別	摘要
種苗代	蒟蒻二年子	五〇	五、〇	三〇、〇〇	自給	前年畑地に栽培せるものなり 桑肥料は別に野草一〇〇貫、 落葉三五〇貫を施用せり。
肥料代	魚肥	六貫	四、五	二、七〇	購入	
勞力代	植込、手入、收穫	二、二、八、八	七、〇	五、六〇	自給	
設備代	古俵	一、七	〇、四	三、六	自給	
計				三六、六		

ハ、收支決算

(反當)

差引利益金二八、五二圓

勞力代、設備代加算せざる場合差引利益金三四、八〇圓

備考 別記の如く前作の小麥を收入として計算すれば次の様である。

小麥收入一六圓、支出は稈を以て代償されるのである。従つて合計差引利益金四四、二五圓

ニ、收穫物販路の状況

仲買人手渡しの個人取引で居ながらにして取引される便利があるが亦一面好策に乗せらるゝことがある。

ホ、市價變動の有無

三〇貫に付四圓内外の差額(一貫多三〇錢乃至一八錢餘)があつて、變動は頗る大きい。

四、摘要

(一) 間作栽培年数は六ヶ年であるが前記收支計算の如く有利である。

(二) 間作物と生育時期を異にする小麥を前作すれば桑園の利用率を増すことが出来る。

(三) 本間作物は畑地栽培と兼行することに依り頗る好都合である。

(四) 桑園は畦間を廣くするために寄畦となし樹幹を五尺位に高く仕立つるが良い。

(五) 肥料は桑用として堆肥、落葉の如き有機質自給肥料を施せば特に間作物用として多量に施す必要はない。

實例五 (間作物、黄蜀葵製紙に使用す)

比企郡大河村 笠原氏

一、經營概况

(一) 家族及び耕作状況

實數	家族		常雇人		耕作		別		山林原野		家畜			
	男	女	男	女	畑	田	計	山林	原野	牛	馬	豚	雞	兔
割合	七五	七五	一〇〇	一	四五	二四	三	一〇〇	一〇〇	一	一	一	一	一
	以上	六〇歳以下												
	以上	一五歳以下												

家族は勞役に従事し得る大人が六人であるが其中男一人女一人は學籍にありて殆んど手傳ひ得ぬ者である。故に傭人を併せ男三人女二人のみが働き得る状態である。耕作地は農家經營上最も好都合に分配せられ山林

は松杉或は雑木を植栽し落葉の如きは家畜又は肥料の給源を作る尙家畜は子豚或は鶏卵等を産し肥料の給源となる。

(二) 桑園及び養蠶状況

實數	桑園反別		計	用途別桑園反別		計	桑園肥料代(反當)		計	自作小作		計	産繭額	
	普通桑園	主間作其他間作桑園		春蠶	夏秋蠶		兼用	購入費		自給費	桑園		小作	春蠶
六、一	八〇	七	一、〇	一	一	一	八、〇〇	四、〇〇	二、〇〇	七、六	一	五	二七	二〇
六、一	八〇	七	一、〇	一	一	一	八、〇〇	四、〇〇	二、〇〇	七、六	一	五	二七	二〇
六、一	八〇	七	一、〇	一	一	一	八、〇〇	四、〇〇	二、〇〇	七、六	一	五	二七	二〇

主間作桑園とは調査せる間作物を栽培せる桑園である。其他の間作物桑園に於ては大根、牛蒡、菜類を栽培してゐる。

肥料代の購入費は完全肥料十五貫大豆粕二十貫で自給費は堆肥四百貫である。産繭額反當十四貫餘に比し桑園面積稍多きは開墾地の新桑園を含む所以である。

如上の状況により一家に於ける販賣所得となる生産物は蠶繭、米麥、間作物その他の蔬菜類、雜木、豚(子豚繁殖)鶏卵等主なるものである。

二、間作状況

(二) 間作桑園の狀態

間作物の類	地形	土質及肥瘠	桑品種	仕立方	採葉形式	植付距離	樹齡	桑樹の發育狀態
黃蜀葵其他 大根、牛蒡	平坦地	砂質壤土 肥沃	改良鼠返	中刈	春秋兼用	株間二、五尺 畦間四、五尺 反當九六〇株	一年	中庸普通桑園と變りなし。

(二) 桑と間作物との關係

イ、桑の發育と間作物との關係

植付當時の桑に於ては別狀ないが五―六年以上のものに於ては發育は多少劣る傾向がある。即ち春十駄收葉程度のもは差支へないが夫れ以上の桑園に於ては間作物の發育不良となる。故に植付當初の桑園に最も適當するものである。

二―三年連作するときは地力減退し、肥料の有無に拘はらず桑及び間作物共に發育不良となるから連作は不適當である。

畦間は四尺以内なる場合は桑の發育は十駄以下が良い又五尺以上となつても桑の發育が十五駄以上なる場合は間作物の發育は不良となる。

ロ、桑の障害と間作物との關係
特に關係を認めぬ。

ハ、間作物の有無が桑園の管理上に及ぶ影響

秋季の摘桑に多少の不便を感じるが雑草の繁茂を抑制し、中耕除草の労を節減し得る便利がある。

三、收支計算

イ、収入の部

(反當)

品目	種別	數量	金額		販賣の別	摘	要
			單價	價格			
黃蜀葵 (トロ或はタモ)	一年生根	二〇〇	一、二七	二、四〇	販賣		
計				二、四〇			桑園植付當年にして間作物は畦間中央に二條に播種せるなり。三、四年以上桑園に於ては一、條播種となし數量も三割内外減收す。

ロ、支出の部

(反當)

品目	種別	數量	金額		自給の別	摘	要
			單價	價格			
種苗代	黃蜀葵種子	一升	一、〇〇	一、〇〇	購入		
肥料代	完全肥料 人糞 糞沙 蠶沙	二〇〇貫 一〇〇貫 二〇〇貫	一、〇〇 一、〇〇 二、〇〇	五、六〇 一、〇〇 三、〇〇	購入 自給 自給		幾分厚蒔として間引を行へば可なり。桑肥料は別に大豆粕二十貫、完全肥料十五貫堆肥四百貫を施せり。
勞力代	播種、手入、堀取 (荷造)	一人 三人 五人	七、〇〇 二一、〇〇 三〇、〇〇	六、三〇 二一、〇〇 三〇、〇〇	自給 自給 自給		
設備代	繩	計	二、〇〇	一四、六〇	自給		

ハ、收支決算

(反當)

差引利益金六、八〇圓

勞力代、肥料代(人糞尿、蠶沙)、設備代を加算せざる場合差引利益金一四、八〇圓

ニ、收穫物販路の状況

郡農會關係人の斡旋により製紙會社へ共同出荷とせるが結果は面白くなかつた。出荷方法は先づ多量生産を行ひ郡農會の斡旋又は直接製紙會社と取引せねばならぬ。

ホ、市價變動の有無

變動は著しい、一貫八錢より十六錢に及ぶ。又收穫期の前後に於ける相場の變動は一定せず常に需要者側の掛引値段に依つて支配せられ頗る困難である。

四、摘 要

- (一) 間作栽培年數は二ヶ年で未だ確固たるものでないが前記收支計算の如く損失を招くには至らず有利である然し間作桑園は植付一二年のものでなければ不適當である。
- (二) 土質は砂質壤土を最可とし輕植土は餘り適しない、何れにせよ排水可良なる場所を選ばねならぬ。濕潤地に於ては黃蜀葵(トロ又はタモ)根に瘤を生じ、品質を著しく低下し約半値となる憂がある。
- (三) 連作は地力減退するのみでなく栽培に不適當であるから避くるが良い。

(四) 桑園間作以外としては麥作の跡地が最も良い。
 (五) 播種は薄きを可とし、二回位に亘り間引を行ひ八寸隔位にチドリ形二條とするのが最も良い、即ち大根は高價であるが小根は極めて安い。
 (六) 桑園は春秋兼用仕立となし品種は早中晩何れにても差支へない。
 (七) 土寄せは數多く丁寧に、青頸下を長くすることに勉むることが大事である。

實例六 (間作物、黃蜀葵)

一、經營概況

(一) 家族及び耕作狀況

實數	家族		常雇人		耕作反別		山林原野		家畜				
	男	女	男	女	桑園	畑田	計	山林原野	牛	馬	豚	雞	兔
割合	一七	一一	四三	三三	四三	三三	三三	四六	三三	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

家族は大人勞力を有するもの五人で小人の數は可成多い。
 耕作地は桑園、畑、田等均衡し一方山林より肥料の給源を生産してゐる。

(二) 桑園及び養蠶狀況

實數	桑園反別		用途別桑園反別		桑園肥料代(反當)		自作小作		産額			
	普通桑園	主間作桑園	其他間作桑園	計	春蠶主用	夏秋蠶主用	兼用	計	購入費	自給費	計	計
割合	三八	三五	一三	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	六三	三七	一〇〇	一〇〇

主間作桑園とは調査せる間作物を栽培せる桑園である。
 肥料代の購入費は配合肥料二十貫餘で自給費は堆肥二百五十貫、蠶沙百貫である。反當産額は十四貫餘で稍少いが秋蠶期に於て作柄が不良であつた結果である。
 如上の狀況により一家に於ける販賣所得となる生産物は産繭、米麥、雜木、間作物其他の蔬菜類等である。

二、間作狀況

(一) 間作桑園の狀態

間作物の種類	地形	土質及び肥瘠	桑品種	仕立方	採葉形式	植付距離	樹齡	桑樹の發育狀態
黃蜀葵 (トロ又はタモ)	平坦地	砂礫質壤土	中刈	春秋兼用	株間三、〇〇尺 畦間五、〇〇尺	八年	中庸春十駄内外收葉程度	

(二) 桑と間作物との關係

イ、桑の發育と間作物との關係

桑の發育には別状ない。

ロ、桑の障害と間作物との關係

特に關係を認めぬ。

ハ、間作物の有無が桑園管理上に及ぶ影響

著しき不便を感じることはない。

三、收支計算

イ、収入の部

(反當)

品目	種別	數量	金額		販賣の別	摘	要
			單價	價格			
黃蜀葵 (トロ又はタモ)	一年生根	一四〇	二	一五、四〇	販賣	桑園古きため、タモの收穫量少なし。	
計				一五、四〇			

ロ、支出の部

(反當)

品目	種別	數量	金額		購入の別	摘	要
			單價	價格			
種苗代	種子	一升	一、五〇	一、五〇	購入		
肥料代	配合肥料	二〇貫	三、〇〇	六、〇〇	購入	桑肥料は別に堆肥二五〇貫糞沙一〇〇貫を施せり。	
計				八、〇〇			

ハ、收支決算

(反當)

勞力代	播種、手入、堀取	計	三、三六六 二二八	七〇	八、四〇	自給	
計				一五、九〇			

差引利益金五〇圓

勞力代を加算せざる場合差引利益金八、九〇圓

ニ、收穫物販路の狀況

郡農會の斡旋により小川製紙會社と取引し共同出荷である。

ホ、市價變動の有無

變動は頗る著しい、概して收穫期の初期高値で後期安値である。其の差額は年により異なるが昭和五年には一貫八錢乃至十五錢である。

四、摘要

(一) 間作栽培年數は僅か一ヶ年で前記收支計算の如く頗る有利とは云ひ難いが、損失を招くことはないやうである。

實例七 (間作物、大麥)

一、經營概況

入間郡高萩村 金子氏

(一) 家族及び耕作状況

實數	家族		常雇人	耕作反別	山林原野	山林原野	牛	馬	豚	雞	兔
	男	女									
實數	11	11									
割合	50	50									

家族は大人勞力を有するもの三人であるが、主人は公吏で全力を用ゆることは出来ない。耕作地に於ては畑作最も多く桑園、田地共に少ない、畑地に於ては米麥其他の蔬菜類を栽培して居る。

(二) 桑園及び養蠶狀況

實數	桑園反別		用途別桑園反別	桑園肥料代(反當)	自作小作	產額
	普通桑園	主間作其他間作桑園				
實數	23	12				
割合	66	34				

主間作桑園とは調査せる間作物を栽培せる桑園である。

肥料代の購入費は配合肥料二十貫で自給費は堆肥三百貫である。

産繭額は桑園反當十五貫餘で餘り多收でない。之は其他の耕作地稍々多ければ桑園の全能率を發揮せぬため

である。

如上の狀況により、一家に於ける販賣所得となる生産物は繭繭、蔬菜類、米麥の一部、雞卵等主なるものである。

二、間作狀況

(一) 間作桑園の狀態

間作物の種類	地形	土質及肥瘠	桑品種	仕立方	採葉形式	植付距離	樹齡	桑樹の發育狀態
大(關)麥(取)	平坦地	輕(ノッベ土)肥沃	十文字	中刈	春秋兼用	株間四、〇尺 畦間五、〇尺 反當五〇株	二〇年	中庸

(二) 桑と間作物との關係

イ、桑の發育と間作物との關係

桑の發育には別狀なく桑園は前年晩秋蠶期に尖端伐採を行ひ供用せるものである。従つて桑の發育春十駄以上に及ぶ時は尖端伐條を行ひ、桑の發育の程度に依り中間伐條をもなすべきである。然らざれば間作物の發育は不良となる。間作物は畑地に於けるものと發育上毫も劣るところはないのである。地力は肥料の多施により減退することはない。

桑園は畦間五尺株間五尺を以て最も適當とする。然し桑の發育不良なる場合は四尺にても良いが生産能率を減ずることは免れない。

ロ、桑の障害と間作物との關係

桑の凍害は他のものに比し稍著しき傾向がある(尤も桑園は被害激甚地である)

ハ、間作物の有無が桑園管理上に及ぶ影響特に不便を感じることはない。

三、收支計算

イ、収入の部

(反當)

品目	種別	數量	金額		販賣の別	摘
			單價	價格		
大麥	穀粒	二、二〇石	一(四七手)三五〇円	一六、三九	自家消費	麥收穫量は俗稱四俵七分弱にして普通畑地に僅か劣るのみなり。
同計	麥稈	一五〇	一(四七手)三五〇円	一、五〇	自家消費	
				一七、八九	費別	

ロ、支出の部

(反當)

品目	種別	數量	金額		購入の別	摘
			單價	價格		
種苗代	種	二升一合		七、四	自給	
肥料代	米糠、木灰、堆肥	三三、三五、三五、二、一五		一、三三	自給	桑肥料は別に堆肥二百貫を施せり。
勞力代	播種、手入、收穫	二、一七		八、〇〇	自給	
設備代	俵	二〇		一五、二九	自給	
計				二〇、〇四		

品目	種別	數量	金額		購入の別	摘
			單價	價格		
種苗代	種	二升一合		七、四	自給	
肥料代	米糠、木灰、堆肥	三三、三五、三五、二、一五		一、三三	自給	桑肥料は別に堆肥二百貫を施せり。
勞力代	播種、手入、收穫	二、一七		八、〇〇	自給	
設備代	俵	二〇		一五、二九	自給	
計				二〇、〇四		

ハ、收支決算

(反當)

差引利益金二、六〇圓

勞力代、肥料代(米糠、木灰、堆肥)設備代を加算せざる場合差引利益金一四、三四圓

ニ、收穫物販路の狀況

地方米穀商と個人取引を行ひ別に不便を認めない。

ホ、市價變動の有無

年に依り相當の變動あるが五年度に於ては餘り著しくない。

四、摘要

(一) 間作栽培年数は二ヶ年であるが前記收支計算の如く有利である。

(二) 桑園は夏秋蠶専用が最も良いが春秋兼用と雖も尖端伐條に依つて大なる支障はない。
 (三) 麥作に堆肥を施用すれば特に桑肥料を施す必要はない。
 (四) 桑品種は兼用桑の場合は晩生種が最も良い。
 (五) 桑園は排水可良なる土地であることが必要である。

實例八 (間作物、葱)

一、經營概況

(一) 家族及び耕作状況

實數	家族		常雇人		耕作反別		山林原野		家畜					
	男	女	男	女	田	畑	計	山林	原野	牛	馬	豚	雞	兔
割合	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
實數	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

家族は大人勞力を有するものが三人で他は殆んど援助しない。

耕作地は桑園及び田地が大分を占め畑地は極めて少ない。尙豚は肉用とし肥料の給源となる。

(二) 桑園及び養蠶狀況

實數	桑園反別		用途別桑園反別		桑園肥料代(反當)		自作小作		產額			
	普通桑園	主間作其他間作桑園	春蠶主用	夏秋蠶兼用	購入費	自給費	桑園	小作	春蠶	夏秋蠶	晚秋蠶	計
割合	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
實數	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

主間作桑園とは調査せる間作物を栽培せる桑園である。其他間作桑園に於ては豌豆菠薐草青菜等を栽培してゐる。桑園は耕作地の大分を占め桑葉は悉く自家養蠶に使用する。

反當産繭額は二十二貫餘で相當の能率を擧げてゐる。

如上の狀況により一家に於ける販賣所得となる生産物は蠶繭、間作物類、米麥の一部、豚、卵等主なるものである。

二、間作狀況

(一) 間作桑園の狀態

間作物の種類	地形	土質及び肥	桑品種	仕立方	採葉形式	植付距離	樹齡	桑樹の發育狀態
葱、其他、豌豆、菠薐草、青菜	平坦地	砂質壤土、肥沃		根刈	春秋兼用	株間三、〇尺、畦間五、〇尺	七—〇年	發育稍々劣る。

(二) 桑と間作物との関係

イ、桑の發育と關作物との關係

桑の發育は多少劣るも間作物收穫後の肥料により恢復させることが出来る。普通春十駄以上の收葉能率のない桑園に於ては間作物の發育は良好である。作間は五尺株間は二尺位が最もよい。

ロ、桑園の障害と間作の關係

特に關係を認めぬ。

ハ、間作物の有無が桑園管理上に及す影響

中耕除草等に不便を感じるが一面桑園の手入を省略し得るから大なる支障は認めない。

三、收支計算

イ、收入の部

(反當)

品目	種別	數量	單價	金額	販賣消費の別	摘	要
葱	千本葱	六〇〇	〇、八	四、八〇	販賣		此の冬作として蒔菘草を間作するが反當二百圓を收穫し二十圓内外となる。
計				四、八〇			

ロ、支出の部

(反當)

品目	種別	數量	單價	金額	購入自給の別	摘	要
種苗代	葱苗	二〇〇	四、〇	八、〇〇	自給		自家生産のものなり。
肥料代	硫酸アンモニア 大豆粕	一〇〇 一七(七)	一、三 一、五〇	一、三〇 一、五〇	購入		桑肥料は別に自給肥を施せり
勞力代	植付、手入、堀取	一、二八 一、二八 七	一、五〇 一、五〇	五、六〇 一、七〇	自給		
計				一七、三〇			

備考 冬作として蒔菘草を間作すれば種子代十圓(自家生産)勞力代五圓計十五圓を支出することとなる。

ハ、收支決算

(反當)

差引利益金三〇、七〇圓

勞力代を加算せざる場合差引利益金三六、三〇圓

備考 冬作として蒔菘草を間作すれば差引利益金五圓を收めらる。

ニ、收穫物販路の狀況

製絲場の如き集團地へ販賣し餘暇ある節は個人賣を行ふ。

ホ、市價變動の有無

變動は著しい概して早物或は晩物高値で其間の期は安値である。

四、摘 要

- (一) 間作栽培年数は十ヶ年で前記收支計算の如く有利である特に夏作のみでなく冬作を行ふことは空地利用として有利である。
- (二) 葱は幼苗を以て販賣するのが最も有利であるが生産過剰となれば殆んど價值なきものとなり危険が伴ふ故に間作して發育せしめたるものを販賣するが安全である。
- (三) 葱の跡地の冬作としては前述の如き蒔萩草、豌豆、等が最も良い。

實例九 (間作物福壽草)

一、經營概況

(一) 家族及び耕作状況

實數	家 族		常雇人	耕 地		反 別		山 林	原 野		家	畜 數				
	男	女		田	畑	計	山林		原野	牛		馬	豚	雞	兔	
割 合	四〇	二〇	一〇〇	一〇〇	二〇	七三	四	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

家族は勞役に服するもの二人で他者は一人前でなく尙子守が一人である。

耕作地の主なるは畑で穀菽類、蔬菜類其他を栽培し原野即ち平地林は薪用雜木を植栽し落葉を生産し豚は種用で毎年相當の收入がある。

(二) 桑園及び養蠶状況

實數	桑 園		計	用途別桑園反別		桑園肥料代(反當)		自作小作	產 額						
	普通桑園	主間作其他間作桑園		春蠶	夏秋蠶	購入費	自給費		春蠶	夏秋蠶	晚秋蠶	計			
割 合	一、〇	二、〇	三、〇	一、〇	二、〇	一、〇	二、〇	一、〇	一、〇	一、〇	一、〇	一、〇	一、〇	一、〇	一、〇

主間作桑園とは調査せる間作物を栽培せる桑園である。桑園は小面積なるも大方福壽草を間作してゐる肥料代の購入費は過燐酸石灰五貫で自給費は豚肥六百貫(單價一錢)である。従つて殆んど金肥を使用してゐない然し桑園は春十八畝内外收葉の程度に發育し產繭額は反當二十八貫で頗る多い。

如上の状況により一家に於ける販賣所得となる生産物は蠶繭、福壽草、薪用雜木、仔豚等主なるものである。

二、間 作 状 況

(一) 間作桑園の狀態

間作物の種類	地形	土質及び肥瘠	桑品種	仕立方	採集形式	植付距離	樹 齡	桑樹の發育狀態
--------	----	--------	-----	-----	------	------	-----	---------

福壽草 (八重咲) 其他ナシ	平坦地	輕 肥沃	市 多胡早生	中刈	春蠶兼用	株間 三、〇〇尺 畦間 五、〇〇尺	九年	良好春十八駄内外 の收葉程度。
----------------------	-----	---------	-----------	----	------	----------------------------	----	--------------------

(二) 桑と間作物との關係

イ、桑の發育と間作物との關係

桑と間作物とは相適合する点が多い即ち桑の發育良好なれば間作物も亦發育が良い。従つて一—二年間は全く認めないが三年目に至り間作物堀取の結果桑の根は切斷せらるゝもの多く、四年目の發育稍不良となる觀がある。然しやがて恢復し地力は毫も減退することはない。間作物は株間に植込から之は特に適不適がある。即ち二尺五寸とし之に間作物二株を植込むのが最も良い之より廣ければ能率を低下し狭ければ間作物の發育が不良となる。畦間は五尺を適當とし廣狭何れに偏するも不利となる場合が多い。

ロ、桑の障害と間作物との關係
特に關係を認めぬ。

ハ、間作物の有無が桑の管理上に及す影響

耕耘は大差ないが除草は頻繁に且つ綿密に行ふ必要がある従つて栽培に多少經驗ある者でなければならぬ

不便がある。

三、收支計算 (二ヶ年一期計算)

イ、収入の部 (反當)

品目	種別	數量	金額		販賣の別	摘	要
			單價	價格			
福壽草	芽	一、二、〇〇芽	一芽一錢一厘	一三、二〇〇	販賣		
計	株			一三、二〇〇			芽株は大部分十芽以上を着むるものにして、一千芽一箱として取扱ふ。價格は常に他の商人に比し高く取引さる。

ロ、支出の部 (反當)

品目	種別	數量	金額		購入の別	摘	要
			單價	價格			
種苗代	福壽草株	二五〇〇芽	一芽四厘	一〇、〇〇〇	自給		幾分細小なるものなり。
肥料代	人糞 豚糞 尿肥	三〇〇 三〇〇 三〇〇	一〇、〇〇 一〇、〇〇 一〇、〇〇	三〇、〇〇	自給		桑肥料は過磷酸石灰五貫のみなり。故に豚肥は桑肥料と觀ても差支へなし。
勞力代	植付、手入、堀取、荷造、	四五六八	九〇	一八、〇〇	自給		
設備代	包裝箱及莖	二〇〇	三	三、五二	購入		
計				四六、五二			

ハ、收支決算

(反當)

差引利益金七六、六八圓

勞力代、肥料代を加算せざる場合差引利益金一〇九、六八圓

備考 右收支計算は前記の如く二ヶ年なれば一ヶ年の収益計算は二分の一數を以て表さねばならぬ。

ニ、收穫物販路の状況

個人出荷である賣先は信州仲買人で毎年契約し極めて好都合である。

ホ、市價變動の有無

殆んどない、變動のある場合でも一芽一錢乃至一錢五厘の差額程度である。

四、摘要

(一) 間作物栽培年數は二十五ヶ年であるが前記收支計算の如く有利である。

(二) 間作物は二ヶ年間植栽し分芽せしむることが最も有利である。

(三) 土質は黒色輕埴土(黒ノツベ)で排水可良なるを適當とし赤ノツベ土は不適當である。

(四) 肥料は化學的肥料を廢し堆肥豚肥の如き有機質自給肥料を多量(反當六百貫内外)に施し常に肥沃地とせねばならぬ。

(五) 桑の發育が春二十駄内外の收穫程度の場合に間作物の發育は最も良く決して兩者の發育上に相反することはない。

(六) 間作物は桑園が最も良く普通畑の裸地は殆んど不可能である。

(七) 品種は桑に於ては多胡早生、市平の如き早生種で間作物に於ては八重咲、撫子等が適當である。

(八) 石灰は間作物に對し不適當と思はれしが之を作間に細く埋込めば不結果を認めず桑の發育を助長させることが出来る。

(九) 種芽の拵へ方は頗る重要である即ち三—五芽を着生する株と雖も芽は散在することなく同一箇所より生ずるものゝみを選出して種株とせねばならぬ。前者の如き株は芽の分蘖數は極めて少ない。この操作は秋末に行ふが良い。

(一〇) 種芽の植込は秋末に行ひ冬季霜柱の害を防止するには豫め植込場所を蒲鉾狀に盛土し其の上に株を乗せ細根のみを地中深く埋没して株芽面は成るべく淺く土盛りするのである。

實例一〇 (間作物福壽草)

一、經營概況

(一) 家族及び耕作状況

實數	家		族		常雇人		耕作		別		山林原野		家畜					
	男	女	六〇歳以上	二五歳以上	一五歳以下	男	女	桑園	畑	田	計	山林	原野	牛	馬	豚	雞	兔
一	二	二	二	二	二	一	一	八〇	八〇	一	一六〇	一	二〇	一	一	一	一	一

割合	二〇	四〇	四〇	一	一	五〇	五〇	一	一〇〇	一	一〇〇	一	一	一
----	----	----	----	---	---	----	----	---	-----	---	-----	---	---	---

家族は大人勞力を有するものが四人である耕作地は桑園及び畑のみで畑地に於ては米麥或は蔬菜類を栽培してゐる原野は雜木及び落葉の給源となる。

(二) 桑園及び養蠶狀況

實數	桑園反別		用途別桑園反別		桑園肥料代(反當)		自作小作		產額					
	普通桑園	主用作其他間作桑園	春蠶主用	夏秋兼用	購入費	自給費	桑園	小作	春蠶	夏秋蠶				
割合	二五	七五	一	一	一〇〇	七	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
實數	二、〇〇〇	六、〇〇〇	一	一	八、〇〇〇	一〇、〇〇〇	四、〇〇〇	一四、〇〇〇	八、〇〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
計	八、〇〇〇	一〇〇	一	一	一〇〇	七	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

主間作桑園とは調査せる間作物を栽培せる桑園である。

肥料代の購入費は配合肥料其他で自給費は堆肥四百貫である産繭額は反當十八貫餘である。

如上の狀況により一家に於ける販賣所得となる生産物は蠶繭、間作物(福壽草)蔬菜類、雜木、豚等主なるものである。

二、間作狀況

(一) 間作桑園の狀態

間作物の種類	地形	土質及び肥瘠	桑品種	仕立方	採葉形式	植付距離	樹齡	桑樹の發育狀態
福壽草	平坦地	輕肥沃	多胡早生	中刈	春秋兼用	畦間三、〇〇尺 株數七〇株	六、七年	中庸、春十駄收葉程度

(二) 桑と間作物との關係

イ、桑の發育と間作物との關係

桑の發育には別狀なく春十駄乃至十五駄を收葉する程度が良くそれ以上繁茂すれば間作物の發育は不良となる。

夏秋蠶主用桑園は夏季繁茂著しきため間作物に不適當である。

畦間は五尺内外が適し株間は二尺五寸乃至三尺として間作物を二株宛植込むのが良い。

ロ、桑園の障害と間作物との關係

特に關係を認めぬ。

ハ、間作物の有無が桑園の管理上に及ぶ影響

除草の際注意せねばならぬ不便がある。

三、收支計算

(二ヶ年一期計算)

イ、収入の部

(反當)

品目	種別	數量	單價	金額	消費の別	摘	要
福壽草	芽	10,000	一芽七厘	七〇,〇〇〇	販賣		
計	株			七〇,〇〇〇			桑園に於て賣買せる故全く手数を要せず。

ロ、支出の部

(反當)

品目	種別	數量	單價	金額	購入の別	摘	要
種苗代	種芽株	三,〇〇〇	一芽四厘	一二,〇〇〇	自給		
肥料代	人糞尿	一五〇	一〇	一,五〇〇	自給		細小なる芽株なり。桑肥料は別に堆肥四百貫を施せり。
勞力代	植付、手入	二八五	一,〇〇	二八,五〇〇	自給		堀取荷造は先方にて行ふために手数を要せず。
計				二〇,五〇〇			

ハ、收支決算

(反當)

差引利益金四九、五〇圓

勞力代、肥料代を加算せざる場合差引利益金五八、〇〇圓

ニ、收穫物販路の狀況

大阪、神戸福島長野等の仲買人と個人取引を行ひその出荷方法は植付られたるまゝ芽數により賣買する故極めて便利である。

ホ、市價變動の有無

稍々變動がある昭和四年は一芽一錢三厘餘で五年は六厘内外となる。

四、摘 要

- (一) 間作栽培年數は四十ヶ年であるが前記收支計算の如く有利である。
- (二) 土質は輕埴土が最も適するが開墾地は長年月を経過せざれば極めて不適當である。
- (三) 桑の肥料は堆肥厩肥の如き有機質自給肥料が最もよく化學肥料は頗る不良である。生産せる福壽草により肥料の種類を推察し得る程度に明亮するものである。尙植付の際には雞糞がよい。
- (四) 間作物は連作することは拙つことである。
- (五) 收穫するのは滿三ヶ年を最も有利とするが普通は資本その他の關係上滿二ヶ年を一期とする又六ヶ年以上と経過する時は分蘖するが株の中央部は腐敗し商品として不利となる。

實例一一 (間作物水仙)

北足立郡原市町 齋 藤 氏

一、經營概況

(一) 家族及耕作狀況

實數 割合	家		族		常雇人	耕作	反別	山林原野	家	畜		數		
	男	女	以上六〇歳	以下六〇歳						男	女		山林	原野
100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

家族は大人八人なるが勞役に從事し得るは男二人女二人で他者は何れも學籍にありて殆んど手傳ふことはい。従つて勞力は臨時雇人を購ふことが相當にある。

耕作地は桑園以外には殆んどなく食糧は大部分購入してゐる。

(二) 桑園及び養蠶狀況

實數 割合	桑園反別		用途別桑園反別	桑園肥料代(反當)		自作小作	產繭	額
	普通桑園	主間作其他間作桑園		購入費	自給費			
100	100	100	100	100	100	100	100	100

主間作桑園とは調査せる間作物花卉類を栽培せる桑園である。

桑園は悉く間作物を栽培し畑地の代用となる其他の間作桑園に就てはシアスターデージー、グラジオラス、マーガレット及び其他の花卉類を間作する。肥料代の購入費は完全肥料十貫で自給費は堆肥四百貫である。

産繭額は反當十二貫餘で桑園の割合に尠いがそれは蠶作が充分でないこと、賣桑とすること等に依るのである。

如上の狀況により一家に於ける生活主体は花卉園藝作物の栽培及び養蠶で販賣所得となる生産物は花卉類、繭繭及び雞卵等主なるものである。

二、間作狀況

(一) 間作桑園の狀態

間作物の種類	地形	土質及び肥瘠	桑品種	仕立方	採葉形式	植付距離	樹齡	桑樹の發育狀態
水仙其他 シアスターデー ジョー、グラジオ ラス、トマト	平坦地	輕植土 肥沃	多胡早生	根刈	春秋兼用	株間二、〇尺 昨間四、五尺 反當二〇〇株	七年	中庸、春十駄内外 收葉程度

(二) 桑と間作物との關係

イ、桑の發育と間作物との關係

桑の發育には別狀なく堆肥施用のため却つて增收する傾向がある従つて地力減退の憂もない。

間作物は春十駄内外の收葉程度に於て發育不良となることはない。然し十五駄以上の桑園に於ては春抜切りを行ひ陽光通風に接せしむる必要がある。

畦間は間作物を植込むため五尺内外の廣さが必要である之は畦の中央に一尺五寸幅に五列に伏込むので畦狭き場合は一尺内外幅とするのが良い。然しかゝる場合は球根細小となる傾向がある。

ロ、桑の障害と間作物との關係特に關係を認めぬ。

ハ、間作物の有無が桑園の管理上に及ぶ影響

耕耘は消略される便あるが除草の際特に注意せねばならぬ不便がある採葉上には殆んど變りがない。

三、收支計算

イ、収入の部

(反當)

品目	種別	數量	金額		購入の別	摘	要
			單價	價格			
水仙	開花前球根	二〇、〇〇〇球	一花一錢	二〇、〇〇〇	販賣		温室にて一―三月の三ヶ月間に開花せしめ切花を販賣す。
同	種用實生球	三〇、〇〇〇球	百球三錢	一〇、五〇〇	自家消費		實生球なれば一ケ年後の開花に使用す
同	開花後球根	二〇、〇〇〇球	一箱二圓	六、〇〇〇	自家消費		開花後のものにして一ケ年を経て再び開花するものなり。
計				二七、五〇〇			

備考 球根を販賣するとすれば大小球根合せて十五箱收穫さるゝ故一箱三圓五十錢とすれば計金五十二圓五十錢の收入となる。

ロ、支出の部

(反當)

品目	種別	數量	金額		購入の別	摘	要
			單價	價格			
種苗代	水仙實生球	三〇、〇〇〇球	三錢五分	一〇、五〇〇	自給		堆肥原料は温室内に敷込みたるものにして自給肥料は悉く之なり、桑肥料は完全肥料十貫を施せり、自給二十一圓購入十四圓の割合なり。
肥料代	堆肥	四〇〇貫	一、〇〇〇	四、〇〇〇	自給(四分)		
勞力代	植込、手入、掘取、販賣、	一五人	三五、〇〇〇	三五、〇〇〇	自給(六分)		
設備代	温床償却金	二盞球分	二圓	四〇、〇〇〇			温床設備償却金、管理費、準備金、等を含む
計				八九、五〇〇			

備考 球根を販賣する場合は販賣(花)費、設備費、等消略される故に支出計金二十九圓五十錢となる。

ハ、收支決算

(反當)

差引利益金一八七、〇〇圓

勞力(自給)肥料代を加算せざる場合差引利益金二二二、〇〇圓

備考 球根を販賣する場合(収入五二、五〇圓 支出二九、五〇圓 差引利益金二三、〇〇圓)

ニ、收穫物販路の狀況

切花として東京生花市場へ個人出荷する時期は一月より三月末で極めて便利である。

ホ、市價變動の有無

幾分の變動がある特に初期高値で後期に安値となる其差額は一花二錢五厘より一錢に亘り平均は一錢五厘内外である。

四、摘要

- (一) 間作栽培年数は五ケ年であるが前記收支計算の如く有利である。然し球根の儘販賣するよりは切花として特に冬期温床により開花せしめるものを販賣するのが最も有利である、かやうな方法なれば種球を減ずることもない。
- (二) 土質は砂質壤土が最も適し輕埴土(ノツベ土)は之に次ぐ、肥料は堆肥の如き有機質自給肥料を多用し土地を肥沃となし速効性肥料を避けねばならぬ。
- (三) 桑園の畦間は廣狭により適不適がある絶對的のものでなく比較的容易に間作さるゝ便利がある。
- (四) 間作物の品種は黃金が良い。餘り高價でないが栽培容易で且つ一般人向として需要がある。桑の品種は多胡早生の如き早生種が良い。
- (五) 間作物の裏作としてトマトを間作すれば尙有利である。

附

水仙の跡作としてトマトの間作は利益少なくない。二ケ年間の經驗に依れば水仙堀取前後五月中旬に苗を植付け生育と共に桑條を寄木とすれば七月中旬より八月中旬の一ヶ月間に亘り收穫し得らる。其後は桑の發育に

阻害せらるが故に之を畦間に鋤込み綠肥とすれば桑に被害もなく短日月に相當の利益が見られる。

イ、收入 (反當)

果物(アカナス) 三〇〇貫 四五圓 (一貫一〇錢乃至三五錢平均一五錢)

莖葉(綠肥) 一〇〇貫 一圓 (一貫一錢)

計 四六圓

ロ、支出 (反當)

苗木代 三、〇〇〇本 三〇圓 (自給一本一錢)

肥料代(人糞尿) 一〇荷 一圓 (自給一荷一〇錢)

勞力代 二五人 二〇圓 (自給一人八〇錢、植付三人、手入五人、收穫販賣一七人)

設備代(桑條) 四束 一圓 (自給)

計 五二圓

ハ、收支決算 (反當)

差引損失金六圓

然し右計算に於て支出の部は悉く自家生産なれば實際は相當の勞銀となるのである。故に假りに苗木のみを購入するとすれば收入四六圓、支出三〇圓、差引利益金一六圓となる。

實例一二一 (間作物水仙)

入間郡大井村 野 溝 氏

(一) 家族及び耕作状況

家族	六〇歳以上		六〇歳以下		常雇人	耕作	反別	山林原野	家	畜	數
	男	女	男	女							
實數	1	1	2	2	1	桑園畑田	計	山林原野	牛馬豚雞兔	1	1
割合	1/4	1/4	2/7	2/7	100	7	93	100	100	100	100

家族は大人勞力を有するものが六人で他には殆んど援助する者なく常雇人は二人でその外多少の臨時雇人を以て耕作してゐる耕作地は殆んど畑で西瓜、白菜、牛蒡、甘藷等三町歩餘を栽培してゐる。原野は雜木を生産する。尙豚、雞は肉、卵を生産し肥料の給源となる。

(二) 桑園及び養蠶狀況

實數	普通桑園		主作桑園		其他桑園		計	用途別桑園反別	桑園肥料代反當	自作小作	產繭	計
	反	反	反	反	反	反						
實數	1	1	2	2	1	1	5	計	計	計	計	計
割合	1/4	1/4	2/5	2/5	1/5	1/5	100	100	100	100	100	100

主間作桑園とは調査せる間作物を栽培せる桑園である。肥料代の購入費は配合肥料五十貫で自給費糞糶、白菜屑物等より成る堆肥五百貫である。食糧の米麥の如きは全く購入するのである。養蠶は僅少で秋期に行ひ産繭は絹とし自家用とする。如上の狀況により一家に於ける販賣所得となる生産物は西瓜、甘藷、其他の蔬菜、桑園間作物(水仙)雜木、豚卵等主なるものである。

二、間作狀況

(二) 間作桑園の狀態

間作物の種類	地形	土質及瘠瘠	桑品種	仕立方	採葉形式	植付距離	樹齡	桑樹の發育狀態
水仙 (八重咲)	平坦地	輕埴土 (肥ツベ土)		中刈	夏秋蠶主用	株間四、〇尺 畦間四、五尺 株數六〇〇株	三年及十五年	良好

(二) 桑と間作物との關係

イ、桑の發育と間作物との關係
桑は専用兼用共に別状ない夏秋季に乾燥激しき場合は間作物の球根の發育不良となる。間作物は桑園に限らず畑地に於ても發育するが桑園は有機質多きため至極適當である。

株間は間作物を植込むため四尺を必要とし畦間は四尺五寸あれば夫れ以上廣き必要はない。

ロ、桑園の障害と間作物との關係關係を認めぬ。

ハ、間作物の有無が桑園の管理上に及す影響除草を頻繁に且つ綿密に行はねばならぬ不便がある。

三、收支計算 (五ヶ年一期計算)
イ、収入の部 (反當)

品目	種別	數量	金額		自給の別入	摘	要
			單價	價格			
水仙三年目	花	一八、〇〇〇 _花	一花	九、〇〇〇 _円	販		花は桑園に於て開花せしめたるものなり。本間作物は別記の如く植込してより三年目に初めて開花をみるものにして以後更新するの必要あるものなり然し夫れ以後は再び更新するの必要あるものなれば五年一期として計算せり。
四年目	同	一八、〇〇〇 _花	同	九、〇〇〇	同		
五年目	同	一八、〇〇〇 _花	同	九、〇〇〇	同		
計				二七、〇〇〇			
					販		

備考 開花せる球根は翌年には開花せず休息するものなるが多數の腋球を分蘖するために三年目より三年間は略々同數の開花をみるものである。

ロ、支出の部 (反當)

品目	種別	數量	金額		自給の別入	摘	要
			單價	價格			
種苗代	水仙球根	六〇〇 _個	〇、二〇	六、〇〇 _円	自給		開化せるものを切り取りたる球根を種球とせるものなり。桑肥料は別に一ヶ年に配合肥料五十貫堆肥五百貫を施せり。
肥料代					自給		
勞力代	植付、手入、販賣	五、五〇〇 _人	一、〇〇	二〇、〇〇	自給		
計				二六、〇〇			

備考 一度に植込みたる種球は以後五年間其儘とし分蘖せる新球を以て開花せしむることは前表に記せるが如し。

ハ、收支決算 (反當)

差引利益金二四四、〇〇圓(一ヶ年四八、八〇圓)最盛期三ヶ年間の計算なれば一ヶ年八一、三三圓
勞力代を加算せざる場合差引利益金二六四、〇〇圓(一ヶ年五二、八〇圓)最盛期三ヶ年間の計算なれば一ヶ年八八、〇〇圓

ニ、收穫物販路の狀況
東京生花市場又は川越市花戸へ個人出荷し行先益々需要多き傾向である。
ホ、市價變動の有無
激しき變動なき模様なるも販賣少く詳かでない。

四、摘 要

- (一) 間作栽培年数は五ヶ年であるが前記收支計算の如く有利である。但し切花は需要の如何により温室を以て早春開花せしむれば利潤が頗る多い。
- (二) 土質は砂質壤土を可とするが軽埴土にても差支へない。
- (三) 肥料は有機質自給肥料を多量に施せば桑園の方が却つて球の分蘖数を増すのである。
- (四) 間作物の品種は八重咲よりも單花のラッパの如きものが有望である。
- (五) 間作方法には毎年堀上げ球根を販賣するものと切花販賣とがあるが後者の如きは植込みたるまゝ三年間餘切花を収めらるゝを以て前者よりも有利である。

實例一三 (間作物ザードウキツケン)

一、經營概況

兒玉郡藤田村 金井氏

(一) 家族及び耕作状況

實數	家 族		常 雇 人		耕 作		反 別		山 林 原 野		家 畜				
	男	女	男	女	桑園	畑	田	計	山林	原野	牛	馬	豚	雞	兔
割 合	11	11	40	50	50	50	9	9	100	100	1	1	1	2	10
實 數	3	3	2	2	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1
割 合	11	11	40	50	50	50	9	9	100	100	1	1	1	2	10

人家族は主は公吏で耕作勞役に従事することは極めて稀である。而して男女一人宛中等學校在學中の者と兒童を除けば勞働し得る者は極めて少い。常雇人中女一人は子守で其の外に臨時雇人が相當にある桑園は一部賣桑となし畑は蔬菜を田は米麥を栽培してゐるが少く之等の食糧或は其の副生産物たる粗糠糞糶等は大部分購入するのである。牛は勞役用豚は肉用雞は採卵用として飼養してゐる。

(二) 桑園及び養蠶狀況

實數	桑 園		反 別		用 途 別 桑 園 反 別		桑 園 肥 料 代 (反 當)		自 作 小 作		產 額		
	普通桑園	主間作桑園	其他間作桑園	計	春蠶	夏秋蠶	購入費	自給費	桑園	桑園	春蠶	夏秋蠶	晚秋蠶
割 合	70	100	10	180	1	25	14	86	100	100	82	19	56
實 數	70	100	10	180	1	25	14	86	100	100	82	19	56
割 合	70	100	10	180	1	25	14	86	100	100	82	19	56

主間作桑園とは調査せる間作物を栽培せる桑園である。其他の間作物桑園に於ては馬鈴薯を栽培してゐる。夏秋蠶主用桑園は毎年一反歩位宛を春秋兼用桑園より更新するのである。肥料は購入費は硫安、加里ホス、大豆粕、石灰等で自給費は厩肥百五十貫である。産繭額は反當十七貫餘で餘り多くないが桑園の發育は極めて良好で春秋共に相當の殘桑を生するのである。尙春秋兩期の繭は蠶種製造用で晩秋蠶繭は絲繭である。如上の狀況により一家に於ける販賣所得となる生産物は蠶種、蠶繭、桑等の一部、薪炭用桑條、豚、雞卵等は主なるものである。

二、間作状況

(一) 間作桑園の状態

間作物の種類	地形	土質及び肥瘠	桑品種	仕立方	採葉形式	植付距離	樹齡	桑樹の發育状態
ザアドウイ ツケン其他 馬鈴薯	平坦地	壤土 肥沃	多胡早生 改良鼠返 桑	根刈	春秋兼用	株間二、五尺 畦間五、〇尺 反當 八、四株	一〇年	良好で春收葉十八 駄内外

(二) 桑と間作物との關係

イ、桑の發育と間作物との關係

間作當年に於ては顯著でないが二―三年目に至れば桑の發育に良好となる。尙桑の發育と間作物の發育とは常に一致するやうである。間作物の發育は旺盛なれば五月中旬蠶の四齡頃淺く中刈すれば桑を害するこゝとは全くない。桑園の畦間は五尺あれば充分でそれより廣狹の何れをも要せね本間作物は連作を忌むと傳へらるゝが三年間に於ては認められない。

ロ、桑園の障害と間作物との關係

特に關係を認めぬ。

ハ、間作物の有無が桑園の管理上に及す影響

晩秋期の結束中耕を急がねばならぬ不便があるが其他春は中耕を省略し除草は一回位多いが大なる不便を認めない。

三、收支計算

(反當)

イ、収入の部

▼緑肥用の莖葉は四百貫で假に一貫一錢に見積れば四圓の収益となる。

▼緑肥四百貫中に含有される有機物は五十一貫餘で三要素量は窒素一貫八百六十匁、磷酸八百八十四匁、加里一貫五百七十六匁である。

▼今各々を硫安、過磷酸石灰、硫酸加里等により價格を算出すれば窒素(一貫二圓五十錢)四圓六十五錢磷酸(一貫九十二錢)八十一錢(加里一貫一圓一錢)一圓五十九錢となつて計七圓五錢の収益となる。

▼其外に有機質或は根部等あつて數値を以て表はすことは極めて困難であるが利すること決して少ないのである。

ロ、支出の部

(反當)

▼種子は一升五合の單價七十錢なれば計一圓五錢となる。

▼肥料は普通桑園と同様で特に他の物を施用しない。

▼勞力は播種に一五人中刈に五分人收穫に一人計三人で一人八十錢なれば二圓四十錢となる。

▼以上の費用を積算すれば三圓四十五錢となる。

ハ、收支決算

(反當)

▼差引利益〔緑肥一貫を一錢とせし場合金五十五錢
〔一部の肥料成分より算出せし場合三圓六十錢〕

▼如上の數値は或る假定の下に算出せる結果であつて眞の利益を明示するものでない。本間作物が緑肥として肥料的價値を有することは至大である。

▼春十五駄内外を收葉される桑園に同一肥料を施し間作を行ふときは常に十八駄内外となる條長は平均五寸位長くなると之等のことは正に間作物の効顯と見るべきである。

四、摘要

(一) 栽培年敷は三ヶ年であるが有利である。但し同一地に於ては二年位で止め永く続けぬが良いと思はれるが確かでない。

(二) 家畜の飼料とする場合は夏秋蠶主用桑園に栽培し春中刈をして給與するのが最も良いやうである。

(三) 土地は壤土又は砂質壤土が良く乾燥地又は重粘地は極めて悪く常に桑の發育に伴ふものである。

(四) 稚蠶用桑の如き早生種(市平の如し)のものには根桑を少くし不適當である。

(五) 肥料は石灰の外特に專要する必用はないが必ず桑に施與せねばならぬ。特に有機質肥料は之が發育を良く

するのである。

(六) 五月中旬頃中刈は必らず行ふが稍々淺目に刈ることが次の收量を多くするやうである。

五、桑の收穫量多きもの、實例

實例一

秩父郡長若村 芝崎 氏

(一) 家族及耕作狀況

家族		耕作		反別		山林原野		家畜							
男	女	全耕作	反別對	全耕作	反別對	計	山林	原野	牛	馬	豚	雞	其他		
一	一	一〇、〇	七	一、五	一〇	三、五	二、三	一五、〇	二〇、〇	一	一	一	一		
六〇歳以上	一五歳以下	全耕作	反別對	全耕作	反別對	全耕作	反別對	計	山林	原野	牛	馬	豚	雞	其他
一	二	一〇、〇	七	一、五	一〇	三、五	二、三	一五、〇	二〇、〇	一	一	一	一	一	一

(二) 養蠶狀況

收		繭		額		春蠶		夏の		秋		晩秋	
春蠶	夏蠶	秋蠶	晩秋蠶	計	春蠶	繭	夏の	繭	秋	繭	晩秋	繭	晩秋
一六〇	一	四〇	一〇〇	三〇〇	上	上	上	上	上	上	上	上	上

備考 春蠶の繭質は所屬養蠶組合の共同販賣により一位を占む。

二、收穫多き桑園狀況

面積	土質	地下水	品	種	畦間	株間	仕立方	樹齡	堆肥	大豆粕	硫酸	モニ	ア	水	肥	石	過燐	灰	見	格
二、〇	礫質壤土	高(四尺)	改良	返良	五尺	三、三	根刈仕立(一尺)	五年	三〇〇	一四	一五	五〇〇	二二	一八						

收穫法	反當	收穫量	反當	經營	營	費	桑葉一貫	生産費	
春秋兼用	七〇〇	八〇	三〇〇	二二	一八	八、二	六、五	四、七〇	五、六

備考 一、春は前年晩秋に先端伐採せるを以て總量に對し新梢の割合多く約六〇%なり。

二、收穫法は初秋は小枝を整理して使用し晩秋は先端を一尺二―三寸伐採して條桑を以て使用し下端に全葉若干を残して摘葉せり。

三、摘要

- (一) 調査の桑園收穫量は反當春秋を通じ八百貫を挙げ桑葉一貫の生産費五錢六厘で收穫量多く生産が費著しく安い。
- (二) 收穫を多くせる原因として栽培者の意見は次の様である。
數年前技術者の實地指導に依れることが動機となり桑に適せる土質に對して品種の選擇宜しきを得且栽培技術に注意せるに依るを稱して居る。
- (三) 栽培者の意見の様に土質桑の品種栽培に注意せる外施肥に注意して收穫量を多くし爲めに桑葉生産費著しく低下せるものと思はれる。

實例二

秩父郡久那村 淺賀氏

(一) 家族及耕作狀況

家族	族	雇人	耕作	反別	山林原野家畜數
以六〇歳以上	一五歳以上	桑園反別對	全耕作反別對	畑反別對	山林原野
以上	以下	田反別對	全耕作反別對	全耕作反別對	家畜
男	一	三、〇	一	二	牛
女	三	八、九	一	二、四、六	馬
	三			〇、〇	豚
	一				雞
	一				其他

(二) 養蠶狀況

收額	繭の				柄	
	春蠶	夏蠶	秋蠶	晚秋蠶	作柄	繭質
一八〇	一	一	一	一	上	上
七〇	上	上	上	上	上	上
八〇	上	上	上	上	上	上
三〇〇	上	上	上	上	上	上

備考 蠶種製造の爲め春蠶、秋蠶は種繭となし晚秋蠶は絲繭となす。

二、收穫多き桑園狀況

面積	土質	品種	畦間株間	仕立方	樹齡	施肥量	及價格	反當
一、〇反	粘質壤土	改良鼠返	五尺五尺	根刈	七年	落葉大豆粕	過燐酸モロニア加里水肥	見格
	高低		三	刈				
			三	尺				
			一	尺				

收穫法	反當收穫量				反當經營費				桑葉一貫の生産費
	春條桑	初秋正葉	晚秋正葉	小作料	施肥料	勞銀	價却金	其他	
春秋兼用	七〇〇	一〇〇	一八〇	二〇	二五、七	一七	六、五	六〇、七〇	八、七

備考 一、收穫量中春は條細く發條數多き爲め總量に對し新梢の割合多く約六〇%なり。

二、土地粘質壤土の爲め管理に注意し特に土壤を膨軟ならしむ爲め耕耘を年四回行ふ。

三、摘要

- (一) 調査の桑園は反當春秋を通じ七百貫を擧げ桑葉一貫の生産費八錢七厘で收穫量多く從而桑葉生産費が安い收穫を多くせる原因として栽培者の意見は次の様である。
- (二) 從來土質が堅くして桑の栽培に不適當なりとせらるゝ土地に對し深さ三尺位に天地返しをなし其中に松等の材木及粗菜落葉等を敷込み桑を植付けたるに良好の結果を得たるを動機とし以後年々栽培に注意し落葉の敷込み其他蠶糞を水肥とせるものを多量に使用して土地を肥し尙耕耘を二月、五月、七月、十一月乃至十二月の四回になし土地を膨軟にせるものと稱して居る。
- (三) 栽培者の意見の様に土地に注意をなし且品種の選定宜しきを得た外施肥其他株直しに注意せる爲收穫量を多からしめたるに起因すると思はれる。

實例三

北埼玉郡元和村 小野氏

一、經營概況
(一) 家族及耕作狀況

家族		族	雇人	耕作		反	計	山林原野		家畜		
男	女			田	畑			山林	原野	牛	馬	豚
1	1	1	1	2.7	2.7	2.5	2.0	2.6	7.2	1	1	1
1	1	1	1	2.7	2.7	2.5	2.0	2.6	7.2	1	1	1

(二) 養蠶狀況

收		繭		額		蠶		の		作		柄	
春蠶	夏蠶	秋蠶	晚秋蠶	計	春	夏	秋	冬	計	春	夏	秋	冬
60	1	1	1	3.6	上	上	上	上	上	上	上	上	上

備考 一、秋蠶は淺間山噴火の爲め降灰あり爲めに蠶兒を放棄す。

二、春蠶の繭質は良好にして乾繭組合に於ける格付にて一等賞となる。

二、收穫多き桑園狀況

面積	土質	地下水	品種	畦間	株間	仕立方	樹齡	藁	石灰	硫酸	アン	糞沙	人糞尿	藁灰	見
2.0	砂質壤土	高低	高(七八尺)	改良鼠返	4尺	2.5尺	根刈	5年	5.0	1.0	1.0	2.0	4.5	2.0	1.7

收穫方法	反當收穫量		反當經營費		桑葉一貫匁の生産費
	春(條桑)	初秋(正葉)	晚秋(正葉)	小作料	
春秋兼用	7.0	1.5	1.0	1.1	6.6

備考 一、春の收穫量は枝條の發育佳良にして總量に對し新梢の割合五〇%なり。

二、收穫方法は多胡と改良鼠返を一畦宛交互に植付けてあり之れを春蠶期には稚蠶期に先づ多胡を伐採して使用し壯蠶期に改良鼠返を使用する方針を採れり。而して收穫量は收穫時期等の相違しあるが改良鼠返多き傾向あり。

三、萎縮病の發生極めて少く現在發生せるものは僅に二—三%なり。

三、摘要

- (一) 調査の桑園收穫量は春秋を通じ反當七百二十五匁を挙げ桑葉生産費六錢六厘にして著しく安い。
- (二) 收穫を多くせる原因として栽培者の意見は次の様である。
土地良好なる上に常に人糞尿を施す爲(附近の小學校の糞尿を使用する)土地肥沃となり居るに依るを稱して居る。
- (三) 栽培者の意見の様に土質良好なる上に施肥により土地を肥沃にし品種の選擇宜しきを得且栽植に注意して(二品種を交互に植付て)收穫量を多からしめたる外尙萎縮病の發生極めて少き爲收穫量多く桑葉生産費低下せるものと思れる。

六、少人数にて大量の繭を生産せる實例

實例一

比企郡菅谷村 山下氏

一、經營概況

(一) 家族及耕作狀況

家族	耕作		反別		山林	家畜數	
	男	女	田別	畑別		馬	鶏
六〇歳以上	一	一	一	一	計	一	三
六〇歳以下	三	一	三	一	計	一	三
一五歳以下	一	一	一	一	計	一	三
桑園反別	八〇	四	三	二	計	一	三
全耕作反別	四	三	三	二	計	一	三
全耕作反別	三	二	三	二	計	一	三
桑以外の畑反別	五	二	三	二	計	一	三
全耕作反別	三	二	三	二	計	一	三

備考 一、家族男三人中の一人は十六歳の孫にして蠶業學校在學中なり。

(二) 桑園狀況

二、桑以外の畑作物は麥、豆、陸稻、甘藷、蔬菜類等なり。

用途別	桑園反別		反當施肥量		地代	飼育場よりの距離	耕地別桑園反別
	春秋兼用	夏秋専用	自給	購入			
春秋兼用	七、五	九、四	六、〇〇	一五、〇〇	四丁	三丁	河原地
夏秋専用	〇、五	六、	一五、〇〇	二二、〇〇	四丁	三丁	畑地
合計	七、五	九、四	六、〇〇	一五、〇〇	四丁	三丁	河原地

備考 一、桑品種は春秋兼用は多胡、市平、夏秋専用は魯桑實正なり。

(三) 養蠶狀況

二、樹齡全桑園二十年未滿、栽植本數反當八〇〇本中刈拳式仕立

飼育時期別	掃立量		收		繭		蠶品種	飼育法
	枚數	對計劃合	上繭	同功繭	其他	計		
春	二〇	四七	九、〇〇〇	七、〇〇〇	三、〇〇〇	一〇八、〇〇〇	稚蠶期	到桑全芽育
初秋	二二	二八	五、〇〇〇	七、五〇〇	五、〇〇〇	六四、五〇〇	稚蠶期	到桑育(一段育)
晩秋	二	二五	五〇、〇〇〇	五、〇〇〇	三、〇〇〇	五八、〇〇〇	稚蠶期	到桑育(一段育)
計	四四	一〇〇	一〇〇、〇〇〇	一九、五〇〇	一一、〇〇〇	二三〇、五〇〇	壯蠶期	初秋に同じ

備考 一、初秋壯蠶期の用桑は春秋兼用桑園全部に亘り一株につき枝條七乃至十本(樹勢を考慮し且つ發育良好なる枝條を残す)を残し他を刈り採りて條桑給與となすもので壯蠶期は全然摘葉することが無い。

二、夏秋稚蠶期の平座育は眠除沙以外除沙を行はず。其他飼育上格別變りたることなし。

二、繭一貫目生産に要せし勞力

(一) 春 蠶 (掃立枚數二〇枚 總收繭量一〇八貫)

期 別 延人員概數

摘

要

掃立前の準備	六人	蠶具洗滌、室拵へ消毒等約延六人
一 齡	六	長男一人にて採桑飼育一切を行ふ
二、三齡	二〇	長男夫妻にて従事
四、五齡	六四	主人、長男夫妻の外養蠶雇一人(女能力一〇)
上 簇	一〇	飼育に従事せる人夫以外一〇人なるも作業時間一日未滿なり (近隣養蠶家同志の助け合ひ)
收繭並收繭 後の整理	二〇	
合 計	一二六	

右の延一二六人より次の養蠶以外の作業に従事したる勞力延一〇人を差引き春蠶延人員は約一二六人(内男五〇人)となり。繭一貫生産勞力は延一〇七となる。
尙春蠶期養蠶以外の作業に従事せる延人員は

- 苗代管理 三人
- 陸稻大豆播種 五人
- 甘藷苗植え 〇、五人
- 其他 一、五人
- 合 計 一〇、人である。

(二) 初 秋 蠶 (掃立一二枚 總收繭六四、五〇〇)

期 別	延人員概數	摘	要
掃立前準備	三人	催青、蠶具洗滌、消毒等延約三人	
一 齡	四	長男一人にて従事	
二、三齡	一二	長男夫妻にて従事	
四 齡	一五	主人、長男夫妻(主人は専ら採桑に従事)	
五 齡	二〇	家族以外雇女一人(能力一〇)	
上 簇	一〇	飼育人夫以外隣家助け合ひ約延一〇人	
收繭及後整理	一三		
計	七七		

延人員七七人中より養蠶以外水田の除草其他の所要勞力約延六人を差引き初秋蠶期延七一人(内男三〇人)にして繭一貫生産勞力は延一、一〇人となる。

(三) 晚 秋 蠶 (掃立一二枚 總收繭五八貫)

期 別	延人員概數	摘	要
-----	-------	---	---

掃立前準備	三人	催青、蠶具洗滌、消毒等延三人
一 齡	四	長男一人にて従事
二、三齡	一四	長男夫妻にて従事
四 齡	二〇	主人及長男夫妻
五 齡	三〇	家族の外雇女一人(能力一〇)
上 簇	一〇	近隣助け合ひにて延約一〇人
收繭並後整理	一二	
計	九三	

右延九三人中養蠶以外の作業(桑園除草其他)に従事せし勞力延三人を差引き晚秋蠶勞力は延九〇人(男三八人)にして繭一貫當り勞力延一人五五となる。

以上春夏秋蠶を通計せる總延人員は二七七人にして總收繭二三〇貫五〇〇匁なるを以て繭一貫當り所要勞力は延一人二〇となる。

尙桑園近距離なる爲め桑の運搬には畜力を利用せない。

三、繭 質

常に生繭にて販賣し具体的に判明せざるも數年來該地方として高値に賣却されつゝある由昭和五年度繭一貫單

價は

春	四 ^四 一〇	
初 秋	一、六〇	
晚 秋	一、四〇	(九月一日掃立のもの當地方としては高値の方なりしと)である。

四、摘 要

(一) 養蠶に従事し得る家族としては三人にしてこれに臨時雇女春二〇日初秋、晚秋各七日を雇入るゝのみにて總收繭約二三〇貫なるは勞力に對する收繭量多しと言ふ事が出来る。

繭一貫生産に要する勞力は春一人〇七初秋一人一〇晚秋一人五五である。

(二) 勞力の割合に收繭量多き原因として山下氏の意見は次の如くである。

イ、桑園反當收葉量多きと桑園近距離にある爲め採桑勞力を節減し得らる。

ロ、初秋壯蠶期の條桑收穫は勞力を節減し得ること大なり。

ハ、夏秋蠶稚蠶期の平座育も亦經濟的方法なり。

以上の意見は適當なりと思はる尙技術に熟達せること事業に熱心なることも其の原因であらう。

(三) 桑園反當收葉量の正確なる調査なきも要桑は自給にして大体過不足無きを以て繭一貫生産要桑量を春秋平均十五貫とせば反當收葉量約四三二貫となり、戸當收繭額二八貫八〇〇匁餘にして相當桑園の收穫能率の揚

がれるを認むる事が出来る。

實例二

一、經營概況

(一) 家族及耕作狀況

家族		耕作		反別		山林、原野		家畜	
六〇歳以上	六〇歳以下	一五歳以下	桑園別	全耕作反別	桑園以外の全耕作反別	山林	原野	家	畜
男 一	女 一	男 一	女 一	男 六	女 三	男 二	女 三	男 一	女 一
計 二	計 二	計 二	計 二	計 九	計 三	計 五	計 五	計 二	計 二

備考 一、家族は主人夫妻子女五人にして長女十八歳最年少三歳なり。

二、桑以外の畑作物は麥甘藷モロコシ蔬菜類等なり。

(二) 桑園狀況

用全別	桑園反別	反當施肥量	地代	飼育場よりの距離	耕地別桑園反別
春秋兼用反別	夏秋専用反別	自給購入	計	三丁以内	畑地
五、三	八、六	五、〇〇	一九、〇〇	六、〇	六、〇
計 一三、九	計 一三、九	計 一九、〇〇	計 二四、〇〇	計 六、〇	計 六、〇

備考 一、桑品種、春秋兼用は清十郎、多胡早生、改良鼠返、夏秋専用は魯桑

(三) 養蠶狀況

二、夏秋専用桑は隔年に春秋兼用となす。

三、栽植株數反當一、〇八〇本

四、樹齡全部十五ヶ年以内中刈拳式仕立

飼育時期別	掃立數量	收		其		計	蠶品種	飼育法
		上繭	同功繭	他	計			
春	一五	四七	九五、〇〇〇	三、五〇〇	三、〇〇〇	一〇一、五〇〇	稚蠶 刈芽全芽(準適温育)	
初秋	七	三三	二八、〇〇〇	三、〇〇〇	二、〇〇〇	三三、〇〇〇	稚蠶 刈芽全芽(一段育)	
晩秋	一〇	三三	四〇、〇〇〇	三、〇〇〇	二、〇〇〇	四五、〇〇〇	稚蠶 刈芽全芽(一段育)	
計	三二	一〇〇	一六三、〇〇〇	九、五〇〇	七、〇〇〇	一七九、五〇〇	稚蠶 刈芽全芽(一段育)	

備考 一、春蠶五齡期に於て室内に餘裕なく、蠶種三枚分を野天飼育となす(茲三年來繼續)

二、繭一貫目生産に要せし勞力

(一) 春 蠶 (掃立一五枚 總收繭一〇一貫五〇〇匁)

期 別 延人員概數 摘 要

掃立前準備 六人 蠶具洗滌、消毒、室拵へ等約延六人

一、二齡 二〇 主人夫妻にて従事し一齡期は相當餘裕あるも二齡期は殆んど餘裕なし

三、四、五齡 六三 主人夫妻の外長女を加へ計三人にて殆んど餘裕なきも蠶の眠中に於て畑作物の管理に従事す
 上 簇 一〇 近隣助け合ひ十五人にて従事せるも一日未滿なるを以て一〇人と見積る
 收繭並後整理 二〇

計 一一九

右延人員一一九人中より養蠶以外の作業(甘藷、モロコシ、)に従事せる延人員五人を差引き春蠶延人員一一人(内男四〇人)となり繭一貫當り勞力延一人一二となる。

(二) 初秋蠶(掃立七枚 總收繭三三貫)

期 別 延人員概數 摘 要
 掃立前準備 三人
 一 齡 四 主人一人にて従事
 二、三齡 一二 主人夫妻にて従事
 四、五齡 三〇 主人夫妻の外長女手傳ひ
 上 簇 七
 收繭並後整理 八

計 六四

右の延六四人中より養蠶以外の勞力(桑園除草十二人他作物管理五人)十七人を差引き初秋蠶延人員四七人(内男二五人)にして繭一貫當り勞力延一人四二となる。

(三) 晩秋蠶(掃立一〇枚 總收繭四五貫)

期 別 延人員概數 摘 要
 掃立前準備 三人
 一 齡 四 主人一人にて従事
 二、三齡 一四 主人夫妻にて従事
 四、五齡 四五 主人夫妻の外長女手傳ひ
 上 簇 一〇
 收繭並後整理 一〇

計 八六

右の延八六人中より養蠶以外の勞力(桑園除草三人)八人を差引き延七八人にして繭一貫當り延一人七三となる。

以上春夏秋蠶を通計せる延人員は二三九人にして總收繭量一七九貫五〇〇多なるを以て繭一貫當り勞力は延

一人三三となる。

三、繭 質

常に優良繭を産し従来各種品評會等に於て入賞せる回数頗る多い。尙昭和五年度産繭の生繭百匁實絲量を見るに

春 蠶 (日支、支歐平均) 一一匁四

初 秋 一〇、九

晚 秋 一一、〇である。

四、摘 要

(一) 養蠶に従事し得る家族としては三人にして然も養育に手数を要する子女三人有りて一ヶ年能く約一八〇貫の收繭量なるは勞力の割合に收繭量多しと言ふ事が出来る。

繭一貫生産に要する勞力は春一人一二、初秋一人四二、晚秋一人七三である、

(二) 勞力の割合に收繭量多き原因として吉田氏の意見は次の様である。

イ、桑園近距離なる爲め採桑勞力を節減し得らる。

ロ、桑品種改良の結果反當收葉量多く採桑並飼育勞力を節減し得らる。

以上吉田氏の意見は適當なりと思はる尙氏は事業に對し頗る熱心にして夙に蠶業試験場栽桑講習を修了し優

良桑苗の生産をなしつつあり。桑園管理の如きは能く行届き現に調査の當時(一月十六日)全桑園に亘り桑株

の枯枝を剪除されあるを見た。飼育技術亦優秀にして曾て違蠶せることなしと言ふ。

(三) 桑園反當收繭量約三〇貫にして桑園の收穫能率の揚がれるを知るべく然も耕耘回数は年二回にして經營費の節減合理的に行はれつゝあるを窺ひ知る事が出来る。

實例三

比企郡菅谷村 富岡氏

(一) 家族及耕作状況

家	族		雇人	桑園	耕作	田	反	別	計	山林	家	畜							
	六〇歳以上	六〇歳以下											一五歳以下	一六歳以下	全耕作反別對非合	全耕作反別對非合	全耕作反別對非合	全耕作反別對非合	計
男	一	三	一	三	五	六	〇	三	七	〇	二	七	〇	三	〇	〇	〇	一	五
女	一	三	一	三	五	六	〇	三	七	〇	二	七	〇	三	〇	〇	〇	一	五

備考 一、家族女三人中の一人は一六歳にして女學校在學中なり。

二、桑以外の畑作物は麥、大小豆、陸稻、甘藷、蔬菜類等なり。

(二) 桑園状況

用途別	兼用	桑園	反別	反	當	施	把	量	地	代	飼育場よりの距離	耕地別	桑園反別
反別	歩	全	反	合	別	反	別	歩	合	別	反	合	別

13,000	100	1	4,000	14,000	18,000	15,000	8,000	5,000	8,000	5,000
--------	-----	---	-------	--------	--------	--------	-------	-------	-------	-------

二二四

備考 一、桑品種は多胡早生、改良鼠返、市平
 二、栽植反當八〇〇本、中刈拳式
 三、樹齡十五ヶ年以内

(三) 養蠶狀況

飼育時期別	掃立枚數	對計劃割合	收			計	量	蠶品種	飼育法
			上繭	同功繭	其他繭				
春	二〇	四三	三三〇,〇〇〇	一一,〇〇〇	九,〇〇〇	一五〇,〇〇〇	四七	雜蠶期 到芽育	
初秋	二二	三六	六五,〇〇〇	一三,〇〇〇	四,〇〇〇	八二,〇〇〇	二六	雜蠶期 到芽育(一段育)	
晩秋	一五	三〇	七一,〇〇〇	九,〇〇〇	八,〇〇〇	八八,〇〇〇	二七	雜蠶期 到芽育(一段育)	
計	四七	一〇〇	二六六,〇〇〇	三三,〇〇〇	二一,〇〇〇	三三〇,〇〇〇	一〇〇	雜蠶期 到芽育(一段育)	

備考 一、初秋壯蠶期に於ける條桑育は第一例山下氏のものと同様春秋兼用桑園より條桑を以て收穫す。
 二、飼育上に於ては右以外格別變りたる事柄なし。

(一) 春 蠶(掃立枚數二〇枚 總收穫量一五〇貫)

二、繭一貫目生産に要せし勞力

期別 延人員概數 摘 要

- 掃立前準備 六人
- 一 齡 六 妻女一人にて從事殆んど餘裕無し
 - 二 齡 一〇 主人夫妻にて從事(主人は公職を有し時々不在)
 - 三 齡 一五 主人夫妻にて飼育に從事採桑は他の家族にて行ふ
 - 四 齡 三五 家族雇人總動員にて從事
 - 五 齡 四八 右の外桑收穫人夫(男)一人を雇ふ(七日間)
 - 上 簇 一五

收繭並後整理 二五
 計 一六〇

右の延人員一六〇人中より養蠶以外の所要勞力(陸稻大豆等の播種甘藷植え其他雜用)約十人を差引き結局春蠶延人員一五〇人(内男七五人 女七五人)にして繭一貫當り一、〇人となる。

(二) 初秋 蠶(掃立一二枚 總收穫八二貫)

二期別 延人員概數 摘 要
 掃立前準備 三人

二一五

- 一 一 齡 四 妻女一人にて従事
- 二、三 齡 一二 主人夫妻にて従事
- 四、五 齡 四〇 主人夫妻にて大体飼育に従事、採桑は他の家族及雇人にて行ふ
- 上 簇 一二

收繭並後整理

計 一六

初秋蠶延人員八七人にして繭一貫當り一人〇六となる。

(三) 晩秋蠶(掃立一五枚 總收繭量八八貫)

期 別 延人員概數

摘

要

- 掃立前準備 三人
- 一 齡 四 妻女一人にて従事す
- 二 齡 七 主人夫妻にて従事す
- 三 齡 一四 主人夫妻にて飼育に従事、採桑は他の家族にて行ふ
- 四、五 齡 七五 家族雇人全部従事
- 上 簇 一五

收繭並後整理

計 一八

晩秋蠶延人員一三六人にして繭一貫當り延人員一人五四となる。

以上春夏秋を通計せる延人員三七三人にして總收繭量三二〇貫なるを以て繭一貫目當り勞力は延一人一七となる。

三、繭 質

生繭販賣なる爲め具体的に判明せざるも相當優良繭なるもの、如く該地方としては高値に賣却されつゝありと昭和五年度産繭價格は春三圓九五錢、初秋二圓〇〇錢、晩秋一圓五〇錢である。

四、摘 要

(一) 勞力に對する收繭量多しと言ふべく然も桑園の約四割五分は飼育場より約六丁、郡幾川を隔てたる彼岸にありて春期の桑は馬の力を藉りて六束(一駄)宛運搬するの狀態にて、桑園近距離なれば春蠶期の臨時雇は不必要なりと富岡氏は言はれたり。

繭一貫生産に要する勞力は春一人〇、初秋一人〇六、晩秋一人五四である。

(二) 桑園反當收繭額は約廿五貫なるも茲數年來年々殘桑、春期(條桑)九〇〇貫、秋期三〇〇貫あり、賣り桑となしつゝあるを以て、反當收葉量は繭一貫生産要桑量春秋平均十五貫と見積りてこれに殘桑を加ふれば四二七貫

(春全芽秋全葉)にして收穫能率相當揚がれるを認むる事が出来る。

七、繭質優良ノモノヲ生産シタ實例

入間郡堀兼村 松本氏

實例一

一、經營概況

(一) 家族及耕作狀況

性別	家族		耕作		計	山林	家畜數	
	男	女	常用	反別			豚	雞
六〇歳以上	一	一	一	一	二	二	二	三〇
二五歳以上以下	二	二	二	二	四	四	四	四〇
一五歳以下	二	二	二	二	四	四	四	四〇
合計	五	五	五	五	十	十	十	一〇〇

備考 土質輕鬆で農作物比較的良く生育する家人は農事に頗る熱心である。

(二) 桑園狀況

市鼠返	春蠶		秋蠶		總反別	仕立方式
	品種	樹齡	品種	樹齡		
平、改良	七、八年	改良鼠返	七、八年	改良鼠返	一三五	中
伊達赤木	七、八年	伊達赤木	七、八年	伊達赤木	二〇〇	式
合計	一四	一四	一四	一四	三三五	式

反當施肥堆肥三〇〇貫桑完全肥料六〇貫(二三、四〇)石灰一五貫(四〇)

二、養蠶狀況及繭質

蠶品種	收穫量(上繭)	對一ヶ年收穫量歩合	生繭白多	繭價(一貫目)	合	格
春蠶	支歐白繭 103,600	三七%	二、五	三、四	三九七、八二	
初秋蠶	支歐白繭 七、五〇〇	二六%	一	二、五〇	一九八、七五	
晚秋蠶	支歐白繭 九、〇〇〇	三五%	一	二、八〇	二七七、二〇	
合計	支歐白繭 二二、100	100	一	一	八七三、七七	

備考 一、春蠶繭質良好である。初秋蠶晚秋蠶共に繭檢定を行はないが繭價比較的高し。

二、桑園に對する收穫量多く反當二二貫五六〇匁である。

三、摘 要

(一) 本調査のものは養蠶規模大きく繭質比較的優良なるものを生産したり。
 (二) 優良繭多收の原因としては

- イ、桑園の肥培良く桑收穫量多きこと。
- ロ、蠶品種の撰擇に注意せると共に飼育技術に熟達し特に壯蠶期に薄飼ひをなし食桑を充分にし且つ上簇法を適當にしたこと、飼育法は稚蠶期は剉桑全芽育とし壯蠶期は條桑育とす。
- ハ、養蠶組合が主体となつて各種の改良を行ひ業務に熱心なること。

實例二

大里郡玉井村 中 村 氏

一、經營概況

(一) 家族及耕作狀況

家 族	年 齡	性 別	雇 入	耕 作		反 別	計	山 林	家 畜 數	
				全耕作	反別				馬	雞
男	二	二	一	一	一	一	一	一	一	一
女	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
計	三	三	二	二	二	二	二	二	二	二

備考 養蠶に従事し得られるは家族の中男一人女一人及び雇人である。

(二) 桑園狀況

區 別	桑 種	多 胡 早 生	改 良 鼠 返	大 島、清 十 郎、市 平	計	收 穫 量 (反 當)
反 別	七、八年	四反	三反	一反	八反	春 四二〇貫(條桑) 秋 二五〇貫(全葉)
樹 齡	七、八年	七、八年	七、八年	七、八年		

春秋兼用桑園で根刈拳式です。初秋晚秋に用ひて尙ほ桑葉に餘剩あり反當施肥堆肥六〇、豆粕三五、過燐酸

10%

二、養蠶狀況並に繭質

蠶 品 種	收 穫 量	對一ヶ年上繭	上繭白多	上 繭 價	格
上 繭	一貫	一貫	一貫	一貫	一貫
中繭	一貫	一貫	一貫	一貫	一貫
下繭	一貫	一貫	一貫	一貫	一貫
合計	一貫	一貫	一貫	一貫	一貫

春蠶	日	支	九七、七九〇	六、五八〇	五〇	一、三、七三	四、五七	四、六、九〇
初秋蠶	日	支	三三、五九〇	四、二〇〇	二七	一、	一、	五七、三六
晚秋蠶	日	支	六四、九八〇	七、一四〇	三三	一、	一、	一〇五、二七
合計			一九五、三六〇	一七、九二〇	一〇〇			六〇九、五三

備考 桑園に對する收購量反當り二六貫六六〇匁である。

稚蠶飼育は居宅兼用蠶室にて適濕育により給桑は刈桑全芽である、壯蠶期は春は屋外條桑育、秋は平飼として上簇は凡て室内で行なふ壯蠶飼育は薄飼ひとして充分に給桑した。

三、摘要

- (一) 桑園反當收購量多く、養蠶規模大きく、且つ繭質良好のものを得たり。
- (二) 優良繭を得た原因として

- イ、桑園の肥培良く反當り桑收穫量多いこと。
- ロ、飼育技術に熟達し特に壯蠶期に薄飼ひにし上簇法の改良を行ったこと。
- ハ、養蠶組合を組織し技術者を聘し、桑園改良、飼育改良を徹底的に行つてゐること。

實例三

一、經營概況

南埼玉郡平野村 塚 本 氏

(一) 家族及耕作狀況

家 族	年 令	性 別	職 業	耕 作		別	計	山林	家 畜 數	
				對全耕作	對全耕作				雞	馬
男	六〇歳以上	一	常用	五、七	反	一	一	一	一	一
男	二五歳以下	二	常用	二	反	一	一	一	一	一
女	二五歳以上	二	常用	二	反	一	一	一	一	一
女	二五歳以下	一	常用	一	反	一	一	一	一	一
合計				六、〇	反	三、六	六	一五、七	一	一三〇

老婆一人は養蠶に全く従事しない。

(二) 桑園狀況

反 別	春		秋		秋蠶専用	合 計
	多胡早生	改良	鼠返	群馬赤木		
反當收穫量	三、五	四〇〇	三、五	四〇〇	三八〇	八七
條桑	四〇〇	四〇〇	三、五	三、五	三二〇	

春秋兼用桑園の秋收穫量は反當正葉約一五〇貫である。仕立方は根刈拳式、反當施肥は完全肥料七〇貫及糞を若干施用した。

二、收購量

蠶 品 種	收 量	對一ヶ年上繭	生繭百分	價 格 (上繭)			
上繭	繭一	中繭	玉繭	收購量歩合	生糸量	單價(一ヶ月)	合 計

春蠶	支	歐黃繭	五、八六〇 ^支	四、五二〇 ^支	五 ^支	三三 ^支	三、九九七 ^支	二〇七、二八 ^支
同	日	支	四、五三〇	二、二〇〇	一三	二一、六	三、七二〇	一六八、三六
初秋蠶	日	支	二、四三〇	二、二〇〇	一三	一	二、〇〇〇	四八、七六
晚秋蠶	日	支	五、九二〇	八、三〇〇	三	一	一、五七七	九三、二
合計			一八〇、六四〇	一五、〇二〇	一〇〇			五七、五二

對桑園一反步收繭量二十一貫

三、摘要

(一) 桑園土質は壤土五〇%、輕鬆土五〇%位で桑樹の繁茂は一般農作物と共に良好である。附近一帶養蠶養繭盛に行はれてゐる。

(二) 飼育法は稚蠶期は居宅及専用蠶室にて適濕育を行ひ壯蠶期春は條桑育秋は平飼とし何れも屋内である。薄飼多桑主義にて飼育したことが優良繭生産の原因であらう。

八、共同事業ヲ行フモノノ實例

實例一 (共同購入の實例)

某郡養蠶組合

一、共同事業の概況

(一) 養蠶組合が組合員の申込を徴して煉炭原料として粉炭の共同購入を行ふ。
(二) 粉炭共同購入状況(昭和六年分)

品目	數量	單價	價	物資引取場所	購入先	購入物資の品質
大嶺無煙粉炭	一三〇 ^噸	一噸	一四三〇	某驛(レール渡)	東京市	良好 硫黄分少し

二、共同事業の効果

以上の材料を以て製造した煉炭の價格と市價との比較は次の様である。

種別	對粉炭一噸煉炭製造個數	以上の煉炭一個の價格	煉炭一個の市價	市價との比較	摘要
六寸煉炭	二六八	六、六二	一六、〇〇	九、三八 ^支	一箱三十六個人
五寸同	四二八	四、一七	一一、〇〇	六、八三 ^支	一箱一圓二十錢相場
四寸同	九一二	一、九六	三、七五	一、七九 ^支	一箱一圓二十錢相場
三寸同	一七〇〇	一、〇五	二、一四	一、〇九 ^支	一圓二十錢相場

備考 以上の粉炭一噸より煉炭を製造せる場合の経費内譯

- 一、粉炭一噸代 一四四三〇
- 一、角又六〇〇匆代(粘土の場合は無料) 五〇
- 一、石灰三斗九升(二二斗入一袋三五錢) 五四
- 一、製造手間賃(一日一圓) 二、〇〇
- 一、器具損料代 五〇
- 合 計 一七、八四

以上の表に示して居る様に粉炭を共同購入して農閑を利用して煉炭の製造を行ひ市價より著しく安價な製品を得て居ることが注目し値する。

實例二 (物資の共同購入)
(繭の共同販賣)

一、組合概況

比企郡中山村某養蠶組合

人員	組合創立年月	共同事業の種類	組合豫算(昭和五年度)	組合費徴収法						
四二名	大正十一年四月	物資の共同購入 蠶種の共同販賣 繭の共同販賣	<table border="1"> <tr> <td>收 入</td> <td>支 出</td> </tr> <tr> <td>三六九四八一</td> <td>三一九四八一</td> </tr> <tr> <td></td> <td>(剰餘金五〇圓は 基金として積立)</td> </tr> </table>	收 入	支 出	三六九四八一	三一九四八一		(剰餘金五〇圓は 基金として積立)	繭の販賣代金割
收 入	支 出									
三六九四八一	三一九四八一									
	(剰餘金五〇圓は 基金として積立)									

共同事業開始の動機は繭の共同販賣の有利なことを痛感した爲であつて組合團結の良好な原因は勿論組合役員の献身的努力と組合員の協調によるものが多いが一面物資の共同購入と繭の共同販賣等の物質的利点と又該地方は水害地方なる爲と宗教的訓練による精神的方面の團結心の強固なこと等が原因して居る。

二、共同事業

(一) 物資の共同購入(昭和五年)

品 目	購入數量	單 價	購入 經費	市價との比較	購 入 先	購入物資の品質	摘 要
蠶種立器	二〇二個	二、一五	—	、〇一五	比企郡乾繭組合	良	
木炭	二五七、七〇〇	二、八五	—	、二〇〇	比企郡小川町	兩小口、一等品	
肥料	一、〇〇〇	三、一〇	三、一〇〇	、四、五〇	比企郡中山村	一等品良	
桑苗	二、四〇〇	二、〇〇	—	、二、〇〇	比企郡東吉見村		
フォルマリ	八本	二、四〇	—	、四〇〇	松山町		
蠶座紙	三三六枚	一、一五	—	、〇五〇	比企郡中山村		蠶座紙の大きさ 二、五×四、〇
亞鉛板	二枚	九、一五	—	、〇一五	松山町		
紙帳	一組	一、四五	—	、〇五〇	比企郡中山村		八疊間大

備考 以上の外に蠶種の共同購入を行ふて居る。

(二) 蠶種の共同催青(春蠶種)

催青枚數 四八〇枚
支 出 一一四七七

内 譯

補温費 六四四八
皆川蕙 一、八〇
乾濕計 九〇
其 他 二、九五
人夫賃 無償共同勤務
蠶種一枚當り經費 一〇三
收 入 八、六〇
組合員外委託催青手数料

(三) 繭の共同販賣 (昭和五年)

春秋別	品 種 名	數 量	單 價	品 質	市價との比較	販賣方法	販 賣 先	蠶種立數
春	支四×支五	一三九、三〇	掛目 三九、五	平均糸量 一、一三五	二掛高	正量取引	乾繭組合出荷、原製糸	バラ種 三〇八箱
初秋	豊×支一〇	四九六、一四〇	一、八〇	良	三錢高	鑑定取引	同	二〇三九丸
晩秋	×支一〇	二二七、四〇	同 二、〇〇	良	四錢高	鑑定取引	同	三六〇五丸

實例三 (物資の共同購入 (繭の共同販賣))

比企郡乾繭販賣利用組合某支部(松山町)

一、組合概況

人 員	組合創立年月	共同事業の種類	組合豫算(昭和五年度)	組合費徴収法
一一〇名	昭和二年二月	物資の共同購入 繭の共同販賣 桑苗圃費補助 育繭競進會	收 入 一〇〇〇〇〇 支 出 八四、〇〇〇 (二月現在)	戸 數 割 收 繭 割

二、共同事業

(一) 物資の共同購入 (昭和五年)

品 目	數 量	單 價	市價との比較	購 入 先	購入物資の品質	摘 要
肥 料	七五〇 ^{kg}	一呎(十 ^{kg} 入)	四〇 ^円 安	松山町	良	磷酸二價、蛹粕二 ^{kg} 五、大豆粕二 ^{kg} 、加里、八〇〇 ^{kg} 、ホシカ八〇〇 ^{kg} 、夕、アンモニア一 ^{kg} 九

備考 以上の外に蠶種の共同購入を行ふて居る。

(二) 繭の共同販賣 (昭和五年)

春秋別	品 種 名	數 量	單 價	品 質	市價との比較	販 賣 方 法	販 賣 先	蠶種立數

春	日一×支四	一六〇〇	一貫	三〇八三	〃	三〇〇	乾繭取引肉眼鑑定	純水館	支六
初秋	日一×支四	一三五〇	〃	一九九五	〃	三〇〇	乾繭取引改良取引	同	支四
晚秋	日一〇×支一〇	一六〇〇	〃	一七八〇	〃	三〇〇	乾繭取引肉眼鑑定	同	支四

實例四 (物資の共同購入)

北足立郡大谷村某養蠶組合

一、組合概況

人員	組合創立年月	共同事業の種類	組合豫算 (昭和五年度)	組合費徴収法
三〇名	大正三年四月	物資の共同購入 繭の共同販賣 繭母子講 桑園の共同經營 稚蠶共同飼育 稚蠶飼育共進會 産繭共進會 共同貯金	収入 五二五、八〇 (村補助あり)	支出 五二五、八〇 戸數割 掃立枚數割

共同事業の動機は繭の共同販賣は個人賣に比し有利なことを痛感した爲で團結の良好な原因は組合役員の犧牲的努力と組合員の協調とに負ふものが多いが尙以上の物質的利点も原因して居る。

二、共同事業

(一) 物資の共同購入 (昭和五年)

品目	數量	單價	價	市價との比較	購入先	購入物資の品質	摘	要
大豆粕	四五〇 <small>枚</small>	六月拂	一、〇七	〃	全購聯	良	昭和六年	
蠶座紙	一、八〇〇 <small>枚</small>	對百枚	一、七三	〃	上尾町	良	三尺角	
フオルマリン	四五 <small>ボンド</small>	煉炭として	二、八五	〃	上尾町	良	二尺五×三尺五	
粉炭	一五 <small>ト</small>	一個九錢(六寸)	二、五	〃	大嶺無煙炭	良		

備考 その他農事組合にて各種の共同購入及共同販賣を行ひ。

尙蠶種の共同購入をも行ふて居る。

(二) 繭の共同販賣 (昭和五年)

春秋別	品種名	數量	單價	價	販賣方法	販賣先	蠶種掃立數量
春	支四×支五	七五	四、三〇	肉眼鑑定三等級に分つ	渡邊製糸	一八〇 <small>枚</small>	
秋	豐×圓	一、二五〇	二、一〇	同	同	二七〇	
晚秋	日一〇×支一〇	一、二五〇	一、五〇	同	同		

實例五 (物資の共同購入)

大里郡御正村某養蠶組合

一、組合概況

人員	組合創立年月	共同事業の種類	組合豫算(昭和五年度)	組合費徴収法
八七名	大正八年十月	物資の共同購入 繭の共同販賣 共同桑苗圃 蠶種の共同保護催青 組合頼母子講による 蠶業資金の融通 荒廢桑園の改植	収入 四一〇〇〇 支出 四一〇〇〇	戸數割 掃立枚數割 收繭割

共同事業開始の動機は繭の共同販賣は個人賣に比し有利なる爲と蠶種の保護催青は個々にて行ひしものに比し結果が良好なことが痛感された爲で團結の良好な原因は組合役員の犠牲的努力と組合員の協調とに負ふものが多いが尙以上の結果は良好なる爲と又組合の資金を早く拵へること等が原因して居る。

二、共同事業

(一) 物資の共同購入 (昭和三年)

品目	數量	單價	市價との比較	購入先	購入物資の品質	摘	要
木炭	雜堅	三〇五	四二	熊谷町	良一等		
蠶座紙	上中	四七〇	一〇〇	熊谷町			
障子紙	中上	二〇〇	〇〇	熊谷町			
		一〇〇	〇〇				
		五〇〇	〇五				

フォルマリ	五〇	三六	信用組合
-------	----	----	------

備考 以上の外に蠶種の共同購入を行ふて居る。

(二) 繭の共同販賣 (昭和五年)

春秋別	品名	數量	單價	販賣方法	販賣先	蠶種數量
春	日一 × 支四	二、六三	一貫三、七	陳列肉眼取引	熊谷町松崎製糸	五五〇
同	支七 × 歐七	一、〇四	三、七〇	同	同	一八三
初秋	日一〇七 × 埼白支一〇五	三、三八	二、一〇	同	同	八〇
同	同	四、三	一、一〇	同	同	一八〇
晩秋	同	一、〇五五	一、五五	同	同	三〇〇

實例六 (物資の共同購入) (繭の共同販賣)

一、組合概況

北埼玉郡埼玉村某養蠶組合

人員	組合創立年月	共同事業の種類	組合豫算(昭和五年度)	組合費徴収法
一七五名	大正六年五月	物資の共同購入 繭の共同販賣 蠶種の共同催青	収入 一二六一、八三三 支出 一二六一、八三三	戸數割 掃立枚數割

桑苗圃及指導桑園設置
蠶業に關する共進會
技術員設置及養成
蠶業視察
害虫驅除

共同事業の動機は蠶品種を統一して之を共同販賣を行ひ有利に販賣しやうとするのに在つた以後かゝる目的を實現して居る。之れが組合員團結の良好な原因であるが一面組合役員の献身的努力と組合員の協調とに負ふ所が多い。

二、共同事業

(一) 物資の共同購入 (昭和五年)

品目	數量	單價	市價との比較	購入先	購入物資の品質	摘要
粉炭	(100斤入) 一七八斤	一、二〇	六寸煉炭一個として(四一〇六安)	大嶺炭坑株式會社	硫黄分少し	圓(噸三円三)
昇汞	一〇〇	一、六六	六〇錢安	大 阪 市		
フオルマリ	九五	二、六		鴻 巢 町		
鹽酸	一一	八、五		東 同		
大豆粕	二、八〇〇	一、三		東 京 市		昭和六年

備考 以上の外に蠶種の共同購入を行つて居る。

(二) 繭の共同販賣 (昭和五年)

春秋別	品 種 名	數 量	單 價	市價との比較	販 賣 方 法	販 賣 先	蠶種 掃立數量
春	歐七×支七	八八五、八七〇	一貫 四、〇〇〇	二錢高	肉眼鑑定三等級に分つ	三龍社	一二三
初秋	日 支	一六四、四四〇	一、二五		同 等級なし	乾繭出荷	
晩秋	日 支	四九七、三六〇	一、六〇		同 四等級に分つ	三龍社	一二二

摘 要

以上の實例の實績に徴すれば場所により價格に高低はあるが物資の共同購入及繭の共同販賣は個人の場合に比し養蠶家に有利なことは明になつて居る。之れは前者の場合は大量購入の爲で後者の場合は優良なる蠶種の共同購入を行ひ蠶品種の統一を圖り催青より土簇に至る迄互に練磨協力し品質の統一した良繭の生産を圖り之れが共同販賣による大量取引を行つた結果に外ならない。

養蠶組合の基礎を確立し組合の振興を圖り以て養蠶家の地歩を確保する爲には前記の如く(組合設立の動機及團結の強固なる原因の項)勿論養蠶家の自覺に俟たねばならぬが一面組合員の生産及經營費を可及的に少くすると同時に販賣上の利益をなるべく多く所得しその實益を増す様に努めねばならぬのである。現下不況時に遭遇せる蠶糸業の状態から考へ特に之れが必要と思はれる。之れが爲には上述した様に諸種の共同事業により品質の統一した良繭の廉價生産を計り而して産繭の合理的處理に努めねばならぬ。斯してこそ共同經營の効果を

如實に示すことが出来るのである。即ち以上の數例は物資の共同購入及産繭の共同販賣に於ける利点を數字に顯したるに留るものであるが尙この外共同經營の直接及間接的利益は見通すことが出来ないものである。以上の様に大同團結の力は實に偉大であつて難局打開の爲にこの力を利用することが必要と思はれる。斯くするには組合役員の犠牲的努力と組合員の自覺協調が肝要である。

九、繭處理ニ關スル實例

實例一

一、組合の概況

組合設立時期 大正十二年五月	組合員數 七五 <small>名</small>	産繭額 (昭和五年)		組合費豫算 (昭和五年)		共同事業の種類 繭共同販賣物資共同購入、桑苗圃指導桑園養蠶技術員設置、蠶種共同貯蔵及催青、低利資金融通、基本財産造成、優利資、繭獎勵會開催等
		春 三、五四〇、九〇〇	秋 一、三七二、五〇〇	初秋 二、五四、三六〇	晩秋 三七九、七五	

二、繭處理狀況

組合員生産繭の處理實績次の様である。
(昭和五年)

項目	季別		共同事業の種類
	春	秋	
貫數	二、三三、五九〇	九四四、九二〇	繭共同販賣物資共同購入、桑苗圃指導桑園養蠶技術員設置、蠶種共同貯蔵及催青、低利資金融通、基本財産造成、優利資、繭獎勵會開催等
掛目	一、二五、三〇〇	二、五四、三六〇	
生繭一貫多値段	四四、四三	四四、一五	
支交雜種	二、三三、五九〇	九四四、九二〇	
支々交雜種	二、八一、四〇〇	四五四、六六〇	
歐支交雜種(黄)	一、二五、三八	一〇、七四	
豊×圓	三九、掛五	一八、掛八	
日支交雜種	四四、八九	二四、〇二	
日支交雜種	二、三三、五九〇	九二七、八四〇	
日支交雜種	一、二五、三〇〇	一〇、一六	
日支交雜種	四四、四三	一七、掛五	
日支交雜種	二、三三、五九〇	二、五四、三六〇	
日支交雜種	一、二五、三八	一六、掛五	
日支交雜種	三九、掛五	一四、七五	
日支交雜種	四四、八九	一四、七五	

大里郡男沼村某養蠶組合

取引方法	昭和四年	
	正量取引 （埼玉 縣産検定による）	同上
市場産相場	三三八〇 〇円三三	同上
差引	(+) 一四〇九	同上
	三二七六 〇円三九	同上
	(+) 一四五六	同上
	〇円四六	同上
	(+) 一四五五	同上
	〇円三三	同上
	(+) 一四四七	同上
	〇円二八	

(昭和四年)

項目	季別	
	春	秋
貫	日支交雑種	九〇四六・一〇
	歐支交雑種（黄）	一一一七・二
掛	日支交雑種	一一三四・三四〇
	日支交雑種	一〇三三・九
生繭一貫多値段	同上	五七三〇
	同上	五九二二
取引方法	同上	五五五・一
	同上	〇円四一
市場産相場	同上	六四三・七
	同上	〇円六一
差引	(+) 〇円五八	(+) 〇円六一
	(+) 〇円五八	(+) 〇円六一

備考 差引欄は本組合と當時市場産相場との差にして(+)は本組合の高値を(一)は安値を意味す。

三、摘要

(一) 産繭処理方法として本組合の様に組合員が共同一致し全部の繭を乾繭組合を利用し繭検定を行ひ實質を明

にし販賣するのは頗る合理的處理方法にして前記の如く一般市場販賣に比して有利なる場合が多い。

(二) 産繭の共同處理其他共同事業の遂行は組合長及役員其他組合員の努力に俟つこと大である。

實例二

一、組合の概況

組合設立時期	組合員數	産繭額		組合費豫算(昭和五年)		共同事業の種類
		春	初秋	収入	支出	
大正九年	四八名	一、三四一、三二〇	二七四、九〇〇	六四四、七四〇	四七六、〇〇	繭共同販賣、物資共同購入、 旋蠶種共同貯蔵、催青、種蠶共 同飼育、桑園基本調査、植整 理、桑樹病虫害豫防、自給 肥料奨励、養蠶技術員設置等

二、繭處理狀況

組合員生産繭の處理實績次の様である。

(昭和五年)

項目	季別	
	春	秋
貫	日支交雑種	二七四九・〇〇
	日支交雑種	六四四七・四〇
掛	日支交雑種	一一一四・〇
	日支交雑種	三九八
差引	(+) 〇円五八	(+) 〇円六一
	(+) 〇円五八	(+) 〇円六一

生繭一貫匁値段	四四五二
取引方法	正量取引法 (埼玉縣繭検定により)
市場繭相場	三四八〇
差引	〇四七二
(+) 改良取引法	
	一四八五
(+) 改良取引法	
	一四四五
(+) 改良取引法	
	一四八二

(昭和四年)

項目	季別	
	春	秋
貫歩数	七一八 _百 二〇〇	五五五 _百 一六〇
掛目	一一 _匁 三三	五 _匁 六五
生繭一貫匁値段	七〇 _匁 〇	六 _匁 七七
取引方法	正量取引 (埼玉縣繭検定により)	改良取引法
市場繭相場	七 _匁 六〇	五 _匁 一〇
差引	〇四三三	〇四五五
(+) 改良取引法		
	六 _匁 七二〇	
(+) 改良取引法		
	六 _匁 六〇	
(+) 改良取引法		
	〇四一七	

備考 差引欄は前例に同じ。

三、摘要

(一) 本組合も組合員がよく共同一致して全部の繭を乾繭組合を利用して販賣する。之は繭處理方法として合理

的にして前記の様に一般市場賣に比して有利である場合が多い。

(二) 産繭の共同處理其他共同事業の遂行は組合長及役員其他組合員の努力に俟つこと大である。

實例三 (委託製糸を行へる實例)

大里郡中瀬村 西田氏

一、經營概況

(一) 家族及耕作狀況

家族 (六歳以下)	雇人 (常)	耕作	反別	家畜數
男 二人	男 一人	桑園反別	全耕作に對する%	牛 一
女 三人	男 一人	桑園以外地	對する%	豚 三
		計		雞 四

(二) 養蠶狀況

年次	種別	立量			繭收			計量
		春	秋	晩秋	春上繭	初秋上繭	晩秋上繭	
昭和四年	六 _匁 種	三三枚	一五枚	二七枚	一六 _匁 、三〇〇	七 _匁 、四七〇	一八、六〇〇	三六四、三七〇
昭和五年	六 _匁 種	六枚	三枚	三〇枚	一五、七〇〇	六、八二〇	一五、六〇〇	三七二、一五〇

二、委託製糸狀況

昭和三年より生繭の全部は深谷町共榮蠶糸生産組合に委託して生糸として販賣せるが其狀況は次の様である

▲春 蠶 繭

年次	種別	委託製糸 繭數量	委託製糸に よる繭一貫 金の受取金	一般市場の繭 一貫金の價格	一般の繭價に比 し委託による繭 一貫價格の差	委託製糸によ る總收入金額	一般市場に賣却 せるものとして の總賣却金	繭 生繭百多 精算糸量	實 生糸十多 繰糸時間
昭和四年		一六九、三〇〇	六、七二	七、五二	(-)	一三六、〇〇	一三六、〇〇	一一、四	三九
五年		一五六、七〇〇	三、八七	三、八三	(+)	六〇六、四二	六〇〇、二六	一一、九	三五

▲初 秋 蠶 繭

年次	種別	委託製糸 繭數量	委託製糸に よる繭一貫 金の受取金	一般市場の繭 一貫金の價格	一般の繭價に比 し委託による繭 一貫價格の差	委託製糸によ る總收入金額	一般市場に賣却 せるものとして の總賣却金	繭 生繭百多 精算糸量	實 生糸十多 繰糸時間
昭和四年		七六、四七〇	四、〇〇	五、五〇	(+)	三五〇、八八	四〇〇、五九	一一、一	四三
五年		六一、八二〇	—	一、五九	—	—	九八、二九	一一、〇	四四

▲晚 秋 蠶 繭

年次	種別	委託製糸 繭數量	委託製糸に よる繭一貫 金の受取金	一般市場の繭 一貫金の價格	一般の繭價に比 し委託による繭 一貫價格の差	委託製糸によ る總收入金額	一般市場に賣却 せるものとして の總賣却金	繭 生繭百多 精算糸量	實 生糸十多 繰糸時間
昭和四年		二八、六〇〇	七、〇〇	六、四五	(+)	八三〇、二〇	七六四、九七	一一、一	三八
五年		一五、六三〇	二、五三	一、六四	(+)	三八八、六九	二五一、九三	一一、三	三七

備考 (一) 五年度春蠶繭の繭代金は殘繭千貫餘もあり精算出來ぬため假受取金として生繭一貫目三十掛とし

ての代金を受取つたのみである。

(二) 同年度初秋蠶繭の繭代金は大部分殘繭として入庫しある關係上調査當時は未だ精算はなかつた。

(三) 一般市場の繭一貫金の單價は其の當時の深谷市場に表はれた平均價格である。

三、摘 要

(一) 繭の處理上委託製糸をなすの利不利は年により時期により一率ではない。即此の實例によれば四年度に於いては晩秋蠶繭を除いては委託製糸よりも一般市場に賣却した方が有利であつて年を通じて百八十四圓餘も利益があつたが五年度に於いては春蠶繭の一部分及初秋蠶繭の精算が決済されておらぬ關係上一般市場に賣却せしものとの間に正確なる比較は出來かねるが前表より伺ふ時は今年は幾分か委託製糸の方に利純がある様に推測さる。

(二) 委託製糸を利用して僅かしか経ぬので眞の委託製糸の價値の良否を決定すると云ふ事は早計の事であるが繭の眞價を明かにし其の時の糸價に應じて販賣すると云ふ事は合理的の繭處理方法と云ひ得る。

(三) 此れを行ふには先第一に信頼し得る製糸所を選定する事が肝要なりと思はる。若し組合共同にして行ふ場合には蠶品種に注意し繭質の統一を圖るを要する。

實例四 (組合製糸を利用)

大里郡花園村

生絲生産販賣利用組合花園組

一、組合の概要

位 置 大里郡花園村(秩父線永田驛より南方約五丁)

資本系統 産 業 組 合

兼營事業 な し

設備釜數 器械製絲 九十四釜

組合員の分布並その數 花園村、武川村、本島村にて四百十五人

二、設立の動機及經過

明治二十七年一月任意組合組織を以て三十一名一團となり座繰製絲共同揚返所を創立した當時繭の處分は概ね生産者自身或は地方仲買人により深谷、本庄方面に持参し販賣し居たるも常に集荷を窺ひて俄に買止めをなす等買人の掛引に翻弄せられて不利を蒙りしのみならずその取引は容量取引にして極めて不公正なるものであつた。この結果地方有志の奮起により前記處理法を講ずるに至たのである。黒田某組長となり明治三十年同所を三十五釜の器械製絲工場に改むると共に地方數ヶ所集合し生糸販賣組合龍紋社を組織し生絲の共同販賣を行ひたるも生産數量少き爲販賣上常に不利不向きを以て止むなく同社を解散し明治三十五年三月群馬縣北甘樂郡富岡町碓氷社に加入し同年五月七十釜に増加し以後同社所屬として經營せるに偶々大正七年五月生絲生産販賣埼玉社の設立せられたるを以て前者を脱退し直に埼玉社に加入し大正九年現組長飯島氏に代り翌十年九十四

釜に増釜し更に近年倉庫及乾繭所をも設置し昭和五年より原料受付制度とした。組合の利用状況を見るに全組合員中約百名は常に生産繭の全額を供繭してこの額は凡全供繭額の六七割を占める殘餘の組合員の供繭は年によりて多少の差がある工場運轉日數は概二百二十日乃至二百五十日である。

大正十一年以降の對生絲百匁の配分金高を示せば次の様である。

年 次	對生絲百匁配分金	對生繭一貫匁の價格(農林省全國平均)	對生繭百匁平均絲量
大正十一年	一三、四〇	九、四六	一〇、〇
同 十二年	一一、六八	九、五〇	一〇、一
同 十三年	一一、三四	六、五八	九、八
同 十四年	一三、二四	九、七二	一一、〇
同 十五年	一〇、一三	八、六二	九、七
昭和 元年	八、九二	五、四七	九、八
昭和 二年	八、九七	五、八八	一〇、〇
同 三年	七、六三		九、九
同 四年			

三、摘 要

組合設立によりて得たる利益

イ、繭處理上の不安不便を除くことを得たり。
 ロ、養蠶經營の投機性を防止しその基礎を鞏固にすることを得たり。
 ハ、農閑期婦人の餘剩勞力を有効に利用することを得たり。
 ニ、共同精神を涵養することを得たり。
 ホ、蠶品種の改善統一を促進することを得たり。
 尙組合製絲を利用して繭處理をなせば一般市場に生繭を販賣したる場合に比し繰絲の賃銀を得るは勿論なるも糸價が漸落の場合は收入金少き場合あるべし。故に組合製絲の利用に付ては多年間の平均より見て利不利を判斷せなければならぬ。

實例五 (繰絲及機織)

大里郡本畠村 清水 氏

一、經營概況

(一) 家族及耕作狀況

年次	種別	家族		耕作		反計別	家畜數
		男	女	桑園	反別		
昭和四年	男	三	三	一段七畝九步	一段七畝九步		一
昭和四年	女	三	三	一段七畝九步	一段七畝九步		
昭和五年	男	三	三	三段二畝九步	三段二畝九步		三
昭和五年	女	三	三	三段二畝九步	三段二畝九步		

(二) 養蠶狀況

年次	種別	掃立數量		春收繭		初秋收繭		晩秋收繭		繭出廻り 匆相場	當時取引繭一貫
		春	初秋	上繭	屑繭	上繭	屑繭	上繭	屑繭		
昭和四年	男	一六	七	三七、五〇〇	四、七〇〇	二一、八〇〇	二、一〇〇	—	—	七、八〇	五、二〇
昭和四年	女	一六	七	三七、五〇〇	四、七〇〇	二一、八〇〇	二、一〇〇	—	—	七、八〇	五、二〇
昭和五年	男	一八	三	三八、四〇〇	四、九〇〇	一八、二〇〇	四、九〇〇	一一、一〇〇	一、七〇〇	四、〇〇	二、〇〇
昭和五年	女	一八	三	三八、四〇〇	四、九〇〇	一八、二〇〇	四、九〇〇	一一、一〇〇	一、七〇〇	四、〇〇	二、〇〇

二、自家製絲及機織狀況

(一) 動機

大正十四年の繭價暴落によつて養蠶本業の當村の蒙つた疲弊に鑑みかゝる時の打開策の一方法として、年頃の娘二人が夫々製絲、機織の技術の素養あるを幸ひ十五年の春より養蠶を延長して機織の工程まで行ひ今日に至る。

(二) 器械器具の設備

種別	設備臺數	摘要	種別	設備臺數	摘要
座繰器	一	二、五〇	手機	一	二六、〇〇
座繰鍋	一	一、一〇	小榨	五	一個
座繰機	一	七、六〇			〇、二〇

(三) 繰糸並に機械の時期及生産能率

(1) 繰糸の時期及生産能率

昭和四年		昭和五年	
作業月別	生産高	作業月別	生産高
七月	一六〇 _日	七月	一五 _日
九月	二二	九月	二二
十月	二二	十月	二二
十一月	一五	十一月	二二
十二月	二二	十二月	二二
三月	一三		
四月	一六		
摘要	五、六、八月は養蠶繁忙に付休業		五、六、八月は養蠶繁忙に付休業

(2) 機械の時期及生産能率

昭和四年		昭和五年	
作業月別	生産高	作業月別	生産高
七月	一七 _日	七月	一六 _日
九月	二四	九月	二四
十月	二二	十月	二二
十一月	一六	十一月	二二
十二月	一七	十二月	二五
三月	一五		
四月	一七		
摘要	五、六、八月は養蠶繁忙に付休業		

(四) 消費繭量

備考、繰糸、機械に従事する人は夫々一人宛とす、作業時間は日により異なり不詳。

▼昭和四年

種別	数量
上春繭	三七、五〇〇
繭屑	四、七〇〇
上初秋繭	一一、八〇〇
繭屑	二、一〇〇
上晩秋繭	
繭屑	
計	
摘要	

▼昭和五年

種別	数量
上春繭	三八、四〇〇
繭屑	四、九〇〇
上初秋繭	一八、二〇〇
繭屑	四、九〇〇
上晩秋繭	
繭屑	
計	
摘要	

備考 (1) 昭和五年十二月末日までに消費せし數種である。

(2) 残桑として晩秋繭が一、二貫八百匁ある。(上繭十一貫百匁、屑繭一貫七百匁)

(五) 織物販賣數量及價格

▼昭和四年

種別	数量
上春繭	
繭屑	
上初秋繭	
繭屑	
上晩秋繭	
繭屑	
計	
摘要	

生絹數量(反)	七五	九	二三	六	一三	販賣先
單價(反)	五 _四 五八	三八七	三、九五	三、八七	一	深谷町高田
總額	四一八 _四 八七	三四、八三	九〇、八五	二三、二二	五六七、七七	商事株式會社

昭和五年

種別	春		初秋		計	摘要
	上	繭	上	繭		
生絹數量(反)	五七 _反	一一	二三	一〇	一〇一	販賣先
單價(反)	二 _四 三一	三、四八	二、四二	三、四九	一	深谷町高田
總額	一三一 _四 六七	三八、二八	五五、六六	三四、九三	二六〇、五四	商事株式會社

(1) 三、收支計算
收入

年次	種別	數量	金額	摘要
四年度	生絹賣上代金		一一三 _反	五六七 _四 八七
	熨斗糸賣上代金		二 _一 〇〇	五、二〇
計			一一三 _反	五七三、〇七

年次	種別	數量	金額	摘要
五年度	生絹賣上代金		一〇一	二六〇、五四
	熨斗糸賣上代金		二 _一 〇三	四、〇二
計			一〇一	二六四、〇〇
			五五 _反	一、一〇
				四一九、六六

(2) 支出

年次	種別	數量	金額	摘要
昭和四年度	桑園代金	一八〇 _圓	三五〇〇	一駄二四〇錢
	蠶種代金	二四五 _圓	一四、四〇	春二六蛾一蛾五錢宛 初秋七七蛾一蛾五錢宛
	補溫代金	一二 _圓	一二、二五	一俵九五錢
	原料代金	五六 _圓 一〇〇	二、四〇	春一貫 _五 五錢 三貫 _五 五錢 層繭一貫 _五 五錢 四貫 _七 百 _五 錢
	繭乾料費	五六 _圓 一〇〇	三六九、一八	秋一貫 _五 五錢 七貫 _五 五錢 層繭一貫 _五 五錢 二貫 _五 五錢
	雜費	一〇〇	一〇、六四	生繭一貫目乾燥料十九錢
計			四六七、八七	

年次	種別	數量	金額	摘要
昭和五年	桑園費	—	三五〇〇	春一八二蛾、一蛾四錢、 晚秋二枚、一枚八〇錢、 初秋四枚一枚八〇錢、 一俵九〇錢
	蠶種代金	—	一二、〇八	
昭和五年	補溫費	九	九、〇〇	春一貫目〇〇錢、三八貫四百文、 秋一貫目二〇〇錢、 一八貫二百文、晚秋一貫目一五〇錢、 二貫百文
	原料代金	七九	七九、二〇〇	
昭和五年	繭乾料費	七九	七九、二〇〇	牛繭一貫匁一七錢
	雜費	—	—	
總收入		—	—	—
總支出		—	—	—
總利潤		—	—	—

(3) 差引

年次	總收入	總支出	總利潤	對一日利潤
四年	五七三、〇三	四六七、八七	一〇五、一六	〇、四二
五年	四一九、六六	三〇二、六三	一一七、〇三	〇、五四

三、摘要

(一) 地理的狀態と家族の技術とを巧みに利用して養蠶の傍ら製絲及生絹織を行ふ事は繭處理の方法として有利なる一方法である。

(二) 此の處理方法は一般的ではなくして製絲機織の技術に堪能なる者が家族中にある場合且つ織物の販賣にも都合の良き土地である條件を必要とする。

實例六

一、經營概況

(一) 家族及耕作狀況

性別	年齢	家族	雇人	耕作		山林原野	家畜					
				桑園	全耕作							
男	六〇歳以上	—	—	反別	全耕作反別	計	山林原野	牛	馬	豚	雞	其他
女	一五歳以下	—	—	反別	全耕作反別	計	山林原野	牛	馬	豚	雞	其他
男	一五歳以上	二	—	六、五	六、四	五、三	—	—	—	—	—	—
女	一五歳以上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

備考 三月始より十二月終り迄主として繰絲機織の爲女子三名を雇ふ。

(二) 養蠶狀況 (昭和五年)

種別	數量	金額	備考
春立	三六	—	繭出廻り當時の取引相場(生繭一貫)
初秋	三四	—	
晚秋	—	—	繭出廻り當時の取引相場(生繭一貫)
春收繭	—	八八、〇〇〇	
初秋收繭	—	四〇、〇〇〇	繭出廻り當時の取引相場(生繭一貫)
晚秋收繭	—	三四、七〇〇	
春	—	—	繭出廻り當時の取引相場(生繭一貫)
初秋	—	—	
晚秋	—	—	繭出廻り當時の取引相場(生繭一貫)
春	—	—	
初秋	—	—	繭出廻り當時の取引相場(生繭一貫)
晚秋	—	—	

備考 晚秋蠶發生不良。

二、自家製絲及機織狀況

(一) 動機

古くより飯能町は絹織物盛なる爲に綿織物より生絹に轉じたものである。

(二) 器械器具の設備

名稱	員數	單價	備考
作業場	1	—	住宅土間等を兼用す
織機	2	二五〇〇	手廻機
整經器	1	一五、〇〇	手廻し
足踏器	3	六、〇〇	手廻し
繰返器	1	五、〇〇	手廻し
管卷器	1	五、〇〇	手廻し
揚返器	1	一〇、〇〇	手廻し
小枠	60	〇、三〇	大小 三三〇〇
管	100	〇、〇〇五	
箴	4	二、〇〇	
乾繭装置	1	三〇、〇〇	共同用

(三) 繰絲並に機械の時期及び生産能率

イ、時期三月より十二月に至る(農蠶の繁忙期を除き後全部)

ロ、生産能率

繰絲工程 一人一日八〇匁乃至一〇〇匁

整經工程 四疋又は六疋分半日 (此内綾掛け箴通しを含む)

管卷工程 一人織機五臺分は充分

機械工程 手織一日一反半乃至二反

(四) 消費繭量

自家産繭

一六三、〇〇〇

購入繭

三七、〇〇〇

合計

二〇〇、〇〇〇

備考 此他に生絲八貫七〇〇匁購入

(五) 織物販賣數量及價格

三〇〇疋 此中に昭和四年度産のもの一〇〇疋を含む。

高値 對金壹圓 一三匁 安値 對金壹圓 二六匁

平均 對金壹圓 一八匁

(六) 收支計算

生繭を自家で加工して生絹にして販賣して生繭一貫に對する損益を計算すると次の様である。

季別	項目	生繭一貫毎	同上加工費	合計	生繭一貫より製造される生絹	繭物收入	合計	對生繭一貫損益
春	初秋	四、〇〇	二、三四	六、三四	六、九〇	〇、一五	七、〇五	(+)
初秋		一、六〇	二、三四	三、九四	七、四四	〇、一五	七、五九	(+)
晩秋		一、五〇	二、三四	三、八四	七、六〇	〇、一五	七、七五	(+)
								三、九二

備考 雇人は月給なるため加工費を年平均と見る。生絹價格一疋、春六圓、初秋晩秋を八圓と見る尙糸歩は春

十一匁五分、初秋九匁三分、晩秋九匁五分の割、加工費繰絲工程が不明の爲年平均に見る。

三、摘要

(一) 勞力を巧に分配し養蠶の傍製絲機織をなすは繭の處理方法として有利な一方法であらふ。

(二) 此の處理方法は一般的でなく家族の中製絲機織の技に長じたるものあり且又織物の販賣に都合よき土地なるを要すること前例と同じ。

一〇、副産物處理ノ實例

實例一 (屑繭處理)

南埼玉郡大山村 婦人副業組合

一、經營概況

耕地總面積	田	畑	畑の内訳			養蠶戸數	
			農作畑	桑園	梨畑 其他		
四三〇町	一一一〇町	一一一〇町	一〇〇〇町	八〇町	二五町	五町	約三〇〇戸

二、屑繭處理を始めし動機、經過現況

今より五年前即大正十五年の頃村農會の幹部は當時全村に盛んであつた機業が漸次衰亡の徴にあるのを察しこれに代るべき農閑期(十二月、一月、二月、三月の四ヶ月)の婦人の副業として選ぶに屑繭整理の業を以てしたのである。屑繭整理の仕事はその原料は殆自家の生産するところであつて操作簡單で習熟に難からず加ふるに固定施設を要すること少く又頗る婦人に好適せる手工業であると思惟したからである。依りて農會主催の下に講習會を開き縣より講師を招ぎ専ら眞綿製造のことを修めた、これ同村に於ける本業の濫觴である爾來年々講習會を開ひたが初の二ヶ年間の製品は概ね自家の用に供するに過ぎなかつたが第三年目に至り始めて東京及熊谷地方へ販賣を試み相當の成績を收め翌年より眞綿のみならず絲をも造り昭和五年には縣の獎勵に従ひ同志相集り別に組合を組織し足踏製絲器械を購入し専ら玉絲生絲の類を製造した組合は婦人副業組合と稱しその基

礎を鞏固にし將來の發展を期さんが爲に特に嚴重なる規約を設け農會は之を後援し組合員は初十七名だったがその後増員して今二十三名となり、益々増大の傾向にある。現今組合員中にはその原料繭を自家生産のもののみにては足らず近隣にて購入してをるものさへある製品は十日目毎に集荷し共同販賣を行ひつゝある。従來繭の乾燥貯藏等は各人區々の方法だったが昨昭和五年南埼玉乾繭組合に托して處理した所が其成績極めて良好だったので今後一層乾繭組合を利用し原料受付、共同作業等を勵行し製品の向上統一を圖らんとする意氣込みの様である

三、摘 要

同村の屑繭處理の實績を視るに次の如き利益がある

- (イ) 農閑期婦人の餘剩勞力を有効に利用し得ること
- (ロ) 勤儉の美風を馴致し得ること
- (ハ) 共存共榮の精神を涵養し得ること
- (ニ) 養蠶業の遺利を拾得し得ること

收支計算の一例(昭五、一一末)

支 出

原料代 (但仲升 1日1人分)	乾繭料	燃料(木炭)	雜費	合計
80錢 +	15錢 +	15錢 +	10錢 =	120錢
收入 生絲賣上代金	屑物賣上代金	合計		
238錢 +	5錢 =	243錢		
差引工資及利潤		123錢		

實例二 (桑條白皮)

入間郡鶴ヶ島村 武 藤 氏

一、經營概況

家	族 雇人(常)		耕		作		別	山林原野		家畜數		其他	
	六〇歳以上	六〇歳以下 二五歳以上	全耕作反	反別	全耕作反	反別		山林	原野	牛	馬		豚
男	一	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
女	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

武藤氏は蠶種製造家であつて其家計の主要なるものは蠶種と養鶏に依る收入である。其經營は多角的であつて勞力の分配利用は極めて巧妙である。此二三年農閑を利用して桑條より白皮を採取して居るのであるがまだほんの僅かであつて是れの經營に對して詳細な調査は出來ぬけれど、夏秋蠶専用桑園の多い地方としては非常に有利な副業なりとして將來益々この副業に對して力を注ぐ計劃の様である。

武藤氏は七戸一組合を組成し蒸釜を交替使用し七戸合計年産額二百貫位の白皮を製造して居る。

二、桑條白皮の收支

桑條百貫に對して概略の收支を計算すれば左の通りである。

収入金九圓九十錢	乾燥白皮六貫匁	一貫匁金一圓六十五錢
支出金一圓五拾錢	燃料代	但し一釜分の燃料は懸て出来る白棒の半分丈を之に宛てれば充分である。
差引金八圓四十錢	手間賃、器具損料等	となる。

三、摘 要

桑皮は和紙の原料として有力なものであつて、夏秋蠶専用桑園の多い地方で、農閑期を利用して桑條を剝皮すれば相當の収入を得るものである。其方法は左の通りである。

- (一) 原料となる枝條は、夏秋蠶専用桑園から採るのである。大概一反歩二百貫位の桑條を得らるゝ。
- (二) 夏秋蠶専用桑園の伐採(からぎり又はおろこみ)は普通春三月彼岸前後に行ふものと考へられて居るが、却つて前年落葉後即ち十二月中に伐ることの方が、發芽を早め伸長が良い。十二月に伐採することに依つて桑の爲めにもなり、剝皮を行ふにも都合が良いと云ふ一舉兩得のこととなるのである。
- (三) 伐採後剝皮までの枝條は乾燥させぬ様に基部を浸水するか又は保濕の方法を講じ蔭所に立てかけて置くのが良い。

- (四) 伐採した枝條は、なるべく横枝の多いものを除き、一尺五寸位の長さに「押し切り」で切斷し、一貫匁位を一束にする。

- (五) 調製された枝條は、蒸釜に入れて一定時間蒸し上げねばならぬが、其の蒸釜は簡単なトタン製のものが便利である。其寸法は直徑三尺深さ一尺の湯を入れる釜と夫れにかぶさる二尺の筒とより成り湯釜の中には高さ一尺の框を組み込んで置かねばならぬ。一切で大概七圓位で出来る。

- (六) 此蒸釜一釜に桑條は約二十貫から二十五貫を容れる事が出来此一釜分が一人で一日に白皮と仕上げの事が出来るので一釜分一貫匁から一貫二百匁の白皮を得らるゝのである。

- (七) 蒸釜の湯が沸騰してから枝條を入れる。

- (八) 蒸し上げ時間は品種に依つて異り

改良鼠返、魯桑、三徳、魯國野桑、カタネオは約二時間

十文字、改良早生十文字、清十郎、甘樂桑、市平は約一時間半

外観上、枝條切斷部の皮層が一、二分收縮し木質部が白く見える程度になつた時が良い。此觀察をする爲め蒸釜上部にある孔から時々ぞいて見るのが良い。

- (九) 蒸し上つたら、釜の蓋(圓筒)を取ると同時に急に冷水をかけ、黒皮と白皮が剝げ易くし、同時に減つた釜の湯を補ふ。

14.2a
236

- 一六二
- (十) 斯くして枝條を釜から取り出し、冷水に、四、五時間浸し、取り上げて剥皮器（一臺三圓五十錢）にかけて黒皮を剥ぐのである。剥いだ白皮は、直に桶の中に浸漬し、更に十本位づゝ一括して、流水中に一晝夜晒してから取り上げて乾燥するのである。
 - (十一) 充分乾燥したら、品質に依つて選別し、三ヶ所緋五貫匁束とし濕氣を受けない所に貯藏して置くがよい。

昭和六年三月十四日印刷
昭和六年三月十六日發行

埼玉縣蠶業試驗場

電話三一七番

埼玉縣北埼玉郡忍町大字行田二五〇番地
印刷人 今 津 寬 之 助
印刷所 今 津 印 刷 所

終

